女子國文新編

四年制

巻二

375.9
Ka9
資料室

42378
教科書文庫
4
8/0
42-1938
200030
1505

資料室
3959
Ka 5

文部省檢定濟
昭和十三年二月四日　高等女學校國語科教科書

女子國文新編

四年制

東京高等師範學校教授
垣内松三編

一　國民文化と國語教育との關係を基本として國民精神の涵養を意圖しました。

二　教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。

三　縱に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。

四　右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。

廣島大學圖書之印

廣島大学教育
35907

目次（巻二）

一　月見草……阿部次郎……四
二　蟲の音……沼波瓊音……七
三　村鍛冶……夏目漱石……一一
四　翼……吉江喬松……二四
五　溪をおもふ……若山牧水……三〇
六　野菊……島木赤彦……三八
七　三人の時計……長與善郎……四〇
八　雲萍雜志抄……柳澤淇園……四八
九　茶話……薄田泣菫……五一
一〇　國旗……（日の丸由來記）……五六
一一　明治天皇の御遺物を拜す……笠井信一……六六
一二　星の名……野尻抱影……七八
一三　國字四書……（高等小學讀本）……八四
一四　樂訓……貝原益軒……八七
一五　伊勢參宮……五十嵐力……九一
一六　敬神の情……杉浦重剛……九六
一七　音……宮城道雄……一〇三
一八　近江聖人の幼時……村井弦齋……一〇九
一九　幸福……穗積重遠……一一七
二〇　歌御會始……千葉胤明……一二一
二一　盲坑夫……下位春吉……一二六
二二　茶の間……島崎藤村……一三七
二三　至誠……小林一郎……一四九
二四　櫻井驛……松居松翁……一五七
二五　國史に還れ……德富蘇峯……一六八

附錄　字音假名遣一覽

一月見草

阿部次郎

月見草は私の好きな花の一つである。取離していふと、黄色は自分の特に好きな色の部類に屬してはゐないが、あの花瓣の柔かさと、あの清新な鮮かさと、またその花を見る夕暮や曉のすがすがしさとは、月見草の仄かな黄色をいひがたく懷かしいものに思はせる。

自分は或夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出來ない。朝まだ暗い中に、狹苦しく滿員になつてゐる旅亭を出て、同宿のI君やM君と新舊兩街の間の野原を歩いた。月見草が曉近いので、いくらか萎れかゝつて、限りもなく咲續いてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分達は言葉すくなに並んで歩きながら、なんともいへず親しい氣持になつて、やがて旅亭に歸つた。

今自分の家の庭にも一株の月見草がある。或日の夕暮、私はこの花の咲くところを眼のあたり見た。食後二階の欄干に凭つてゐると、その蕾の急に膨らんで來るのが見えるやうに思はれた。昔の人が蓮の花の開くのを見て、悟を開いたといふ話を仄かに想ひ起しながら、急いで庭に出て、その花の傍にしやがんで見て居ると、いかにも今咲きかけてゐる蕾の幾つかがある。最初に花瓣を包んでゐる萼が後退を始める。萼が開くと、卷いてゐた花瓣が次第に膨らんで來て、不意にその一片が急にはじける。さうすると四つの花瓣が一緒にふうはりと開いて來て、遂に蘂を見せて咲いてしまふ。その咲

阿部次郎 哲學者。東北帝國大學教授。明治十六年生。

「仄かな黄色をいひがたく懷かしいものに」

輕井澤 長野縣北佐久郡の町。

「山の霧が廣く流れてゐた」

「言葉すくなに並んで歩きながら」

東京都立図書館

きはじめに、仄かな香氣が鮮かに鼻を撲つ時の氣持は、なんともいはれない。明日の朝になれば、凋んでしまふはかない花ではあるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知れない。

私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても、もとより悟は開けない。悟は開けないが、しかし新しく咲く花を見守る靜かな愛の心は、實に嬉しく有難いものである。（北郊雜記）

靜寂は何の物音もないといふ事ではない。沁みつくやうに靜かな周圍の中に一ひらの木の葉の落ちる音は一層その靜寂を深くし、眞夜中の犬の遠吠は寂しい眞夜中を更に寂しくする。

（阿部次郎）

＊撲つ

「咲く時の新しさ」

「靜かな愛の心」

二蟲の音

沼波瓊音

私は一年の中で秋が一番好きである。「なぜ生きてゐるか、どういふ目的で生きて居るのか。」と問はれれば、「秋を味はふのが生存の一つの目的である。」と答へるぐらゐに、私は秋を好ましく思ふ。私が秋に對して感ずる心持はどうかといふに、荒立つた後に來る澄んだ心持である。悲しいとか、腹立たしいとか、感情が激しく動いた後に、非常に靜かな落着いた心持になる、その荒立つた感情の後に來る心持、それが秋の心持である。兵士が劇しい荒びた戰爭に飽きて發心した心持にでも喩へようか。とにかく細かく優しく、そして澄んだ感じである。

沼波瓊音　名は武夫。第一高等學校教授。昭和二年歿、年五十一。

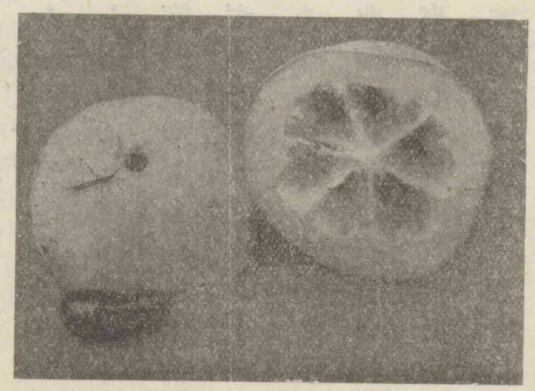
「生存の一つの目的である」

＊發心

「とにかく細かく優しく、そして澄んだ感じである」

かういふ心持は、秋の風物の何物にでも現れてゐる。物の形でいへば、日光・月光・雲・草花など、それらのものにもこの心持は著しく現れてゐる。匂でいふと木の花、觸覺に感ずるものでは冷たい風、聽覺に來るものでは蟲の音、そのすべてに、前に述べた秋の感じは現れてゐるが、殊に蟲の音に最も著しく現れてゐる。

耳に觸れるものでは、春はいろいろな小鳥が啼くし、夏の盛りには蟬が鳴くけれども、蟬の聲は却つてうるさいものである。秋の蟲の音を聞く心持は、春の朧夜に鳴く蛙の聲を聞く心持にも



蟲

「何物にでも現れてゐる」

「蟲の音に最も」

較べられるが、蛙の聲は單調で、卑俗で、蟲の音ほど複雜な優美な感じを起させない。其の點に於て蟲の音は最も優等で、前に述べた秋の感じなり味はひなりを一番深く現してゐる。小鳥の聲だとか蟬の聲だとかは、外的とでもいふのか、外に現れるやうな趣を持つてゐるが、蟲の音は內的である。蟲の音を聞くと、心の眼が內に向つて開くやうな氣持がする。

蟲の音は俳句では秋の季題になつてゐるが、實際は土用の中から鳴初める。それも好い。秋に入つて月夜に鳴くのも好い。闇夜に鳴くのも好く、また聞きながら眠に入るのも好く、夜中にふと目覺めて聞くのも趣がある。朝早く聞く、晴れた日の晝間聞く、雨の降る日に聞く、それ〴〵異なつた情趣があつて、いづれも好い。殊に夜汽車にでも乘つて行くと、或淋

「心の眼が內に向つて開くやうな氣持がする」

土用　夏の土用をいつた。小暑の後十三日（七月二十日頃）より立秋に至る十八日間の稱。

＊好い

＊趣がある

＊情趣があつて

しい驛に着いて、ふと蟲の音を聞くことがあるが、旅の哀れも一入覺えられて、深い味はひがする。また夜の銀座の明かるい賑やかな通を歩いてゐて、一寸細い暗い路地に入ると、足許で蟲の音がしてゐる。趣が更に深い。それから秋、毎晩蟲の音を聞いて、それが冬の初になつて、今まで蟲の音に慣れてゐた耳に、全くなんの音も入らないのに氣づくと、堪らなく寂寥を覺えるものである。

（しら椿）

此の宵はこほろぎ近し厨なる笊の葉などに
居てか鳴くらむ　（長塚　節）

わが採れる紗の燈籠に草色の袖をひろげて
來る蟷螂　（與謝野晶子）

＊深い味はひがする
銀座　東京市京橋區にある大通り。

＊趣が更に深い
「全くなんの音も入らないのに氣づくと」

長塚　節　歌人。小說家。大正四年歿、年三十七。

與謝野晶子　歌人。明治十一年生。

三　村鍛冶

夏目漱石

ぶらりと兩手を下げたまゝ、圭さんがどこからか歸つて來る。

「何所へ行つたね。」

「一寸、町を歩いて來た。」

「何か觀るものがあるかい。」

「寺が一軒あつた。」

「それから。」

「銀杏の樹が一本、門前にあつた。」

「それから。」

「銀杏の樹から本堂まで一丁半ばかり石が敷詰めてあつた。

夏目漱石　名は金之助。文學者。大正五年歿、年五十。

「ぶらりと兩手を下げたまゝ」

非常に細長い寺だつた。」

「はひつて見たかい。」

「やめて來た。」

「其の外に何もないかね。」

「別段何もない。一體寺と云ふものは大概の村にはあるね、君。」

「さうさ、人間の死ぬ所には必ずある筈ぢやないか。」

「成程さうだね。」

と、圭さんは首を捻る。圭さんは時々妙な事に感心する。

暫くして捻つた首を眞直にして圭さんがかう云つた。

「それから鍛冶屋の前で、馬の蹄鐵を換へる所を見て來たが、實に巧なものだね。」

「捻つた首を眞直にして」

「どうも、寺だけにしては、ちと時間が長過ぎると思つた。馬の蹄鐵がそんなに珍しいかい。」

「珍しくなくつても見たのさ。君、あれに使ふ道具が幾通りあると思ふ。」

「幾通りあるかな。」

「あてて見給へ。」

「あてなくつても好いから、教へるさ。」

「何でも、七つばかりある。」

「そんなにあるかい。何と何だ。」

「何と何だつて、慥かにあるんだよ。第一古い蹄鐵をはがす鑿と、鑿を敲く槌と、それから爪を削る小刀と、爪を刳る妙なものと、それから……。」

*何でも

*敲く
*刳る

「それから何かあるかい。」

「それから變なものが、まだ色々あるんだよ。第一、馬の大人しいには驚いた。あんなに削られても、刻られても平氣で居るぜ。」

「爪だもの。人間だつて、平氣で爪を剪るぢやないか。」

「人間はさうだが馬だぜ、君。」

「馬だつて人間だつて、爪に變りはないやね。君は餘程呑氣だよ。」

「呑氣だから見てゐたのさ。然し薄暗い所で赤い鐵を打つと綺麗だね。ぴち〳〵と火花が出る。」

「出るさ。東京の眞中でも出る。」

「東京の眞中でも出る事は出るが、感じが違ふよ。かう云ふ

山の中の鍛冶屋は、第一音から違ふ。そら此所まで聞えるぜ。」

初秋の日脚は、うそ寒く遠い國の方へ傾いて、淋しい山里の空氣が心細い夕暮を促すなかにかあん〳〵と鐵を打つ音がする。

「聞えるだらう。」

と、圭さんが云ふ。

「うん。」

と、碌さんは答へたぎり、默然として居る。隣の部屋で何だか二人頻りに話をしてゐる。

「そこで、その相手が竹刀を落したんだあね。」

「だあね」

よいと小手を取つたんだあね。すると、そのち

「ふうん、とう〳〵小手を取られたのかい。」

「初秋の日脚は、……鐵を打つ音がする」

＊默然

＊小手を取る

「とう〳〵小手を取られたんだあね。ちよいと小手を取つたんだが、そこがそら竹刀を落したものだから、どうにもかうにも仕様がないやあね。」

「ふうん、竹刀を落したのかい。」

「竹刀はそら、さつき落して仕舞つたあね。」

「竹刀を落して仕舞つて、小手を取られたら困るだらう。」

「困らあね、竹刀も小手も取られたんだから。」

二人の話は、どこまで行つても竹刀と小手で持切つて居る。

默然として對坐してゐた圭さんと碌さんは、顏を見合はしてにやりと笑つた。

かあん〳〵と鐵を打つ音が、靜かな村に響き渡る。癇走つた上に何だか心細い。

＊持切る

「まだ蹄鐵を打つてゐる。何だか寒いね、君。」

と、圭さんは白い浴衣の下で堅くなる。碌さんも同じく白地の單衣の襟を搔合はせて、だらしのない膝頭を行儀よく揃へる。やがて圭さんが云ふ。

「僕の子供の時住んでゐた町の眞中に、一軒豆腐屋があつてね。」

「豆腐屋があつて？」

「豆腐屋があつて、其の豆腐屋の角から一丁ばかり爪先上がりに上がると、寒磬寺といふ御寺があつてね。」

「寒磬寺といふ御寺がある？」

「ある。今でもあるだらう。門前から見ると、只大竹藪ばかり見えて、本堂も庫裏もない樣だ。其の御寺で毎朝四時頃に

「白い浴衣の下で堅くなる」

＊爪先上がり

「毎朝四時頃になると、誰だか鉦を叩く」

なると、誰だか鉦を叩く。」

「誰だか鉦を叩くつて、坊さんが叩くんだらう。」

「坊さんだか何だか分らない。只竹藪の中でかん〳〵と幽かに叩くのさ。冬の朝なんぞ霜が強くおりて、布團のなかで世の中の寒さを一二寸の厚さに遮つて聞いてゐると、竹藪のなかから、かん〳〵響いてくる。誰が叩くのだか分らない。僕は寺の前を通る度に、長い敷石と、倒れかゝつた山門と、山門を埋め盡くすほどな大竹藪を見るのだが、一度も山門のなかを覗いた事がない。只竹藪のなかで叩く鉦の音だけを聞いては、夜具のなかで海老の様になるのさ。」

「海老の様になるつて？」

「うん海老の様になつて、口のうちでかん〳〵かん〳〵と云

「世の中の寒さを一二寸の厚さに遮つて聞いてゐると」

「夜具のなかで海老の様になる」

ふのさ。」

「妙だね。」

「すると、門前の豆腐屋が屹度起きて、雨戸を明ける。ぎつぎつと豆を臼で挽く音がする。ざあ〳〵と豆腐の水を換へる音がする。」

「君の家は全體どこにある譯だね。」

「僕のうちは、つまりそんな音が聞える所にあるのさ。」

「だから、何處にある譯だね。」

「すぐ傍さ。」

「豆腐屋の向かい、隣かい。」

「なに二階さ。」

「どこの。」

「豆腐屋の二階さ。」

「へえゝ、そいつは……。」

と、碌さんは驚いた。

「僕は豆腐屋の子だよ。」

「へえゝ、豆腐屋かい。」

と、碌さんは再び驚いた。

「それから、垣根の朝顔が茶色に枯れて引張るとがら〳〵鳴る時分、白い靄が一面におりて、町の外れの瓦斯燈に灯がちらちらすると思ふと、又鉦が鳴る。かん〳〵竹藪の奥で冴えて鳴る。それから門前の豆腐屋が、此の鉦を合圖に腰障子をはめる。」

「門前の豆腐屋といふがそれが君の家ぢやないか。」

「僕の家、卽ち門前の豆腐屋が腰障子をはめる。かん〳〵といふ音を聞きながら僕は二階へあがつて布團を敷いて寢る。——僕の家の油揚は旨かつた。近所で評判だつた。」

隣座敷の小手と竹刀は雙方とも大人しくなつて、向うの縁側では、六十餘りの肥つた爺さんが、丸い背を柱にもたせて、胡坐のまゝ毛抜で顋の鬚を一本々々拔いてゐる。鬚の根をうんと抑へてぐいと拔くと、毛抜は下へ彈ねかへり、顋は上へ反りかへる。丸で器械の樣に見える。

「あれは何日掛つたら拔けるだらう。」

と、碌さんが圭さんに質問をかける。

「一所懸命にやつたら、半日位で濟むだらう。」

「さうは行くまい。」

「僕の家の油揚は旨かつた。近所で評判だつた」

「隣座敷の小手と竹刀」

＊胡坐

＊質問をかける

と、碌さんが反對する。

「さうかな。一日かな。」

「一日や二日で綺麗に拔けるなら譯はない。」

「さうさ、ことによると一週間もかゝるかね。見給へ、あの丁寧に顆を撫廻しながら拔いてゐるのを。」

「あれぢや、古いのを拔いてしまはないうちに、新しいのが生えるかも知れないね。」

「兎に角痛い事だらう。」

と、圭さんは話頭を轉じた。

「痛いに違ひないね。忠告してやらうか。」

「なんて。」

「よせつてさ。」

＊話頭

「餘計な事だ。それより幾日掛つたらみんな拔けるか、聞いて見ようぢやないか。」

「うん、よからう。君が聞くんだよ。」

「僕はいやだ。君が聞くのさ。」

「だからまあ、よさうよ。」

と、圭さんは自己の申し出を惜氣もなく撤回した。

一度途切れた村鍛冶の音は今日山里に立つ秋を幾重の稻妻に碎く積りか、かあん〳〵と澄切つた空の底に響き渡る。

（漱石全集）

＊撤回

「一度途切れた村鍛冶の音は……澄切つた空の底に響き渡る」

四翼

吉江喬松

私は小高い丘の上に立つてゐた。

澄切つた秋の空は紫紺の色をたゝへて、無數の星がぴかぴか光つてゐた。

私は丘の上の草の中へ腰をおろして、じつとして居た。すうつ、すうつと草の葉が擦合つて、下の野の方からは蟲の聲が聞えて來た。

月の昇る前の東の空には淡青い光が漂つて、椋の樹の葉の落ちた枝が細い幾本もの指を伸ばして、その光を掴むやうにしてゐた。

何處か頭の上で、さあつ、さあつと空氣を切つて飛ぶ物音が

吉江喬松 文學博士。早稲田大學教授。明治十三年生。

「丘の上に立つてゐた」

「草の中へ腰をおろす」

「その光を掴むやうにしてゐた」

「空氣を切つて飛ぶ物音がする」

する。はつと思つて私は頸をすくめて見上げた。はつきり見極められないが、薄黑い鳥の影が列をなして行くのが目にはひつた。さあつ、さあつと翼の音が斷續する。

空氣が搖れて、顏へ、頸へ、冷たく當る。と思つてゐると、心が妙に跳るやうで、胸の動悸が高く打ちだした。體軀ぢう波立つて血がめぐる。どつき、どつき鼓動する心臟の響と、さあつ、さあつと空氣を切る翼の音とは調子を合はせて鳴つてゐた。

翼の音が少し遠くなり、微かになつて、その物音の中心が空を滑つて先へ〳〵と移つて行くと、冷たい空氣は幾重にも幾重にも輪を描いて波動を起し、その波動は次第に大きくなつて、丘の上に、野の草の葉先の末にも及んで行くと、蟲の聲はその波動につれて調子をとり、草の葉は同じく波立つて搖れた。

「胸の動悸が高く打ちだした」

「物音の中心」

「波動」

黑い空氣の波の震動、私の心臟もその中につゝまれて、ゆるく波動を立ててゐた。

ぽうつと野は明かるくなつた。森の影が長く黑く黃枯れた草の上へ敷かれて、蟲はいま目を醒ましたやうに爭つて聲を立てた。

私は月の方へ向つて、胸へ深く光を吸ひ込んだ。

月の光の下に、瓦の屋根の竝んでゐる都會が見えだして來た。いつもは騷がしい響の聞えてゐる都會が、その夜に限つて何の物音も立てなかつた。たゞ黑く見えてゐるばかりで、燒け跡か何かのやうだ。

淡靑い光を空にひろげて、次第に月は昇つて來た。丘の下の野も一層廣く明かるくなつて、藪蔭がぽつり〳〵立つてゐ

「空氣の波の震動」

「野は明かるくなつた」

「光を吸ひ込んだ」

「都會が見えだして來た」

るのが見えた。顫へるやうな水溜も見えた。光の波が今度は空にも地上にも漲り溢れてゐた。私の體軀の細い血管の中迄もその波がくゞり入つて、體軀全體がすつきり透りでもするやうな氣がする。

私は暫くじつとして立つてゐた。

さあつ、さあつと、また物音が空に聞える。私はまたはつと思ふと、動悸が打ちだした、何物かの襲來を受けたやうに。頭を仰向けたが、その物音の姿は見えない。が、前よりも一層近くその音は聞えて來た。一層低く、私の體軀よりも一層低く、丘の中腹を掠めて行くやうだ。

私はその響の來る方へ鋭く視線を向けた。雁の群だ。十

「光の波が……漲り溢れてゐた」

「其の波がくゞり入つて」

「さあつ、さあつと、また物音が空に聞える」

＊掠めて

＊視線

「雁の群」

羽ばかりの雁が横に竝んで、ゆるく羽を搏ちながら翔つて行く。右の端にゐる一羽の鳥が他のものよりも少し先へ出て、時々頸を左右に動かし、頭を高く昂げて、勢好く舞つて行く。

群鳥の背を滑つて視線が少し先の草原へ落ちると、そこには舞ひ行く鳥の影が草原の上を斜に流れて行くのが見える。野の果の低い空には、大きな星が澄んだ光できら〳〵してゐるのも見える。

月と雁

大きな鳥の一隊の群、荒い羽搏き、動く長い頸、その一團の生命の波動を身近に感ずると、私は怖しさと不思議さに、思はず聲を立てようとした。我が生

「草原の上を斜に流れて行く」

「我が生が、形の異なつた、羽を持つた我が生が、いま目の前を翔つて行く」

が、形の異なつた、羽を持つた我が生が、いま目の前を翔つて行く。周圍が暗くなつて、たゞ暗い音の波動だけが空にも地にも充ちてゐるやうな氣がした。

暫くたつた。見ると、雁の群はもう稍遠く隔つて、羽搏いてゐるとも思はれない。たゞ薄黑いものがずん〳〵空を流れて行くやうだ。光の波を搔亂し、音と光とが空に亂れて不思議な波動を起し、睡つてゐる地上の草木や人家の屋根に奇妙なリズムを響かせて行くのだ。

鳥の過ぎた後の野原はまたひつそりして、月の光が枯草の根元までも、根元の土の小さな塊團にまでも射しこんで、大地の胸は冷たいその光を飽くまでも吸つてゐた。（若き自然）

「光の波を搔亂し」

リズム 韻律。

「ひつそり」

五　溪をおもふ

若山牧水

溪のことを書かうとして心を澄ましてゐると、さまざまの記憶がさまざまの背景を負うて浮かんで來る。

秋のよく晴れた日であつた。ほつかりした氣になつて、池袋停車場から出る武藏野線の汽車に乘つた。廣々した野原へ出て、思ふさまその日の日光を身に浴びたかつたからである。一度途中の驛へおりたのであつたが、そこらの野原を少し歩いてゐるうちに、野末に近く見えてゐる低い山の姿をみると、是非その麓まで行きたくなり、次の汽車を待つて、その線路の終點驛飯能まで行つた。

若山牧水　名は繁。歌人。昭和三年歿、年四十四。

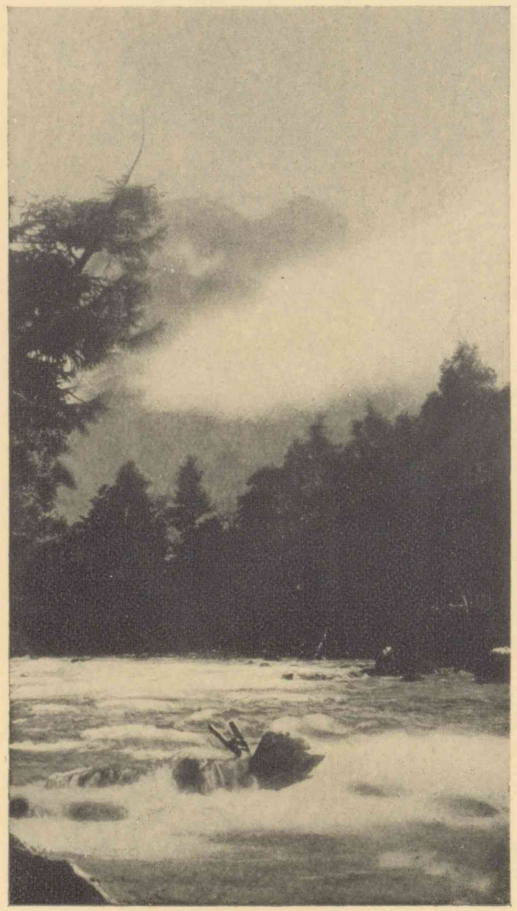
＊背景

池袋　東京市豐島區。

武藏野線　池袋・飯能間の鐵道。現在の武藏野電車。

「是非その麓まで行きたくなり」

飯能　埼玉縣入間郡の町。現在は中間驛。



溪に沿うて

着いた時はもう日暮で、引返すとすると、非常にあわたゞしい氣持でその日の終列車に乘らねばならなかつた。それに何といふ事なく疲れてゐたので、とう〳〵そこに泊つてしまつた。

翌朝早く起きて散歩に出た。漸く人の起出た町を、そのはづれまで歩いて行つて、私は思ひもかけぬ清らかな溪流を見出した。

飯能といへば、野原のはての低い丘の陰にある町だとのみ考へてゐたので、そこに見事な溪が流れてゐようなどとは夢にも思はなかつたのである。少なからず驚いた私は、あわてながらその溪に沿うて少しばかり歩いて行つた。眞白な砂、洗はれた巖、その間を澄みとほつた水が淺く深く流れてゐる。

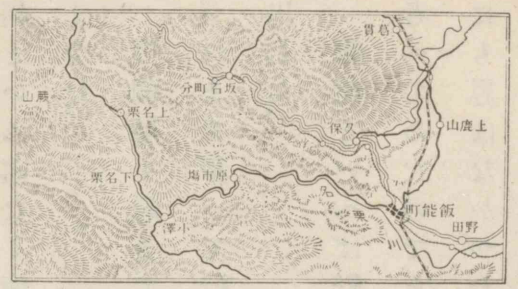
「思ひもかけぬ清らかな溪流を見出した」

昨夜來の疲れをも悉く忘れ果て、急いで宿屋へかへつて朝飯をしまふなり、私はまたすぐ引返して、すつかり落ちついた心になり、その溪に沿ひながら山際の路を上つて行つた。

溪をはさんだ紅葉も深く、諸所に植ゑこんだ大きな杉の林もあつた。

細長い筏を流す人たちにも出會つた。

ゆる〳〵と歩いて、その日は原市場で泊り、翌日は名栗まで、その翌日長い峠にかゝるとともに、その溪はいよ〳〵細く、終には路とも別れてしまつた。そして落葉の深い峠を越すと、そこにはまた新たな溪が流れ出してゐた。



名栗川附近

「急いで……山際の路を上つて行つた」

「筏を流す人たちにも」

原市場 埼玉縣入間郡の村。

名栗 同前。

「終には路とも別れてしまつた」

「新たな溪流」

朝山の日を負ひたれば溪の音冴えこもりつゝ霧
たちわたる
鶺鴒來てもこそをれ秋の日の木洩日うつる岩か
げの淵に
おどろ〳〵とどろく音のなかにゐてまむかひに
みる岩かげの瀧

淺瀨石川といふのは、津輕の平野を越えて日本海の十三潟に注ぐ岩木川の上流の一つである。そこきりで鱒の上るのが止るといふ荒い瀨のつゞく邊に、板留といふ小さな溫泉場がある。

溫泉は川の右岸に當る斷崖の中腹に二箇所と、その根がた

淺瀨石川 一名黑石川。青森縣南津輕郡。

津輕平野 青森縣の西部にあり。岩木川の流域。

十三潟 津輕半島の西岸に灣入せる潟。

岩木川 岩木山の西南麓に發し、十三潟に注ぐ。

の川原に接した所に一箇所と、一二丁づつの間隔を置いて湧いて居る。

私の好んで入つたのはその斷崖の根の溫泉で、入口には蓆が垂らしてあるばかり、板の壁はあらかた破れて、湯の中からでさへ溪の瀨がよく見える。

或日の午後、ぼんやりとひとりで浸つてゐると、次第に湯がぬるんで來た。氣がつくと、板壁の根の方から溪の水がひそかに流れ込んで來てゐるのである。四月の廿日前後であつたが、その日あたりから急に雪が解け始めたらしく、溪の水の濁つて來るのは判つてゐたが、かう急に增さうとは思はなかつた。呆氣にとられて、裸體のまゝ小屋の外に出てみると、赤黑く濁つた水が、ほんの僅かの間に全く川原を浸して流れて居る。丁度そこの對岸の木立のなかに——そのあたりにも水が流れ及んでゐた——網を提げた男が一人、あちこちと歩いてゐる。雪解を待つて鱒は上つて來るといふ事を聞いてゐたが、彼は今それを狙つてゐるのらしい。やがて、また一人あらはれた。

淺瀨石川附近

溪流

雪が解けそめたとはいへ、四邊の山は勿論、ついその川岸か

「ぼんやりとひとりで浸つてゐると」

＊呆氣にとられ

「ほんの僅かの間に」

ら、まだ眞白に積渡してをるのである。その雪と、濁つた激しい溪水と、珍しく青めいたその日の日光との中に、默々として動いてゐるこの鱒とりの人たちが、いかにも寂しいものに私の眼には映つた。

雪解水岸にあふれてすゐかすむ淺瀨石川の鱒と
りのむれ
むら山の峽より見ゆるしらゆきの岩木が峯に霞
たなびく

みなかみへ、みなかみへと急ぐこゝろ、われとわが寂しさを
嚙みしめるやうな心に引かれて、私はあの利根川のずつと上
流僅か一足で跳渡ることの出來るやうに細まつた所までわ

「いかにも寂しいものに私の眼には映つた」

＊雪解水

岩木が峯 一名津輕富士。弘前市の西北十二粁。熄火山。高さ一五九〇米。

「わが寂しさを嚙みしめるやうな心」

利根川 源を群馬縣に發し、關東地方の中部を東に流れ、銚子に至つて太平

け上つたことがある。

狹い兩岸には、もうほの白く雪が來てゐた。斷崖のかげの落葉を敷いて、ちよろ〳〵、ちよろ〳〵と流れてゆく、その氷のやうに滑かな水を見、まだらな新しい雪を眺めた時、何ともいへぬ心に、私は身じろぎすら出來なかつたことを覺えてゐる。今思ひ出しても、神の前にひざまづくやうな有りがたい尊い心になる。

水のまぼろし、溪のおもかげ、それは實に私の心が正しくある時、靜かに澄んだ時、必ずのやうに心の底にあらはれて、私に孤獨と寂寥のよろこびを與へてくれる。（靜かなる旅を行きつゝ）

洋に注ぐ。

「僅か一足で跳渡る」

「私は身じろぎすら出來なかつた」

「水のまぼろし、溪のおもかげ……孤獨と寂寥のよろこびを與へてくれる」

六野菊

島木赤彦

野菊の花を見てゐると、
水の流れる音がする。
野菊の原のくぼたみに、
泉が湧いて居りました。

野菊の花を見てゐると、
こほろぎの鳴く聲がする。
野菊の原の草の根に、
蟲がかくれて住みました。

島木赤彦 本名久保田俊彦。歌人。大正十五年歿、年五十一。

「水の流れる音」

「こほろぎの鳴く聲」

野菊の花を見てゐたら、
雲が通つて行きました。
空に浮かんで行く雲の、
影が花野に動きます。

蟲と泉の音のする、
野菊の原はしんとして、
雲の通つた大空は、
いよ〳〵青くなりました。

（赤彦童謠集）

「影が」

「しん」

「青く」

七　三人の時計

長與善郎

甲・乙・丙の三人が或處へ行かうと思つて、その時間を相談しました。

「一時半の汽車にしよう。」

と、甲がいひました。

「よろしい。しかし今は何時だらう。」

と乙がいひました。

「一時十分前だ。」

と、自分の時計を出して見て、丙がいひました。

「君の時計は合つてゐるのか。」

と、乙が聞きました。

長與善郎　文學者。明治二十一年生。

「君の時計は合つてゐるのか」

「あゝ、僕の時計は正しい。きつちりドンに合はせたのだからだ。」

と、丙が答へました。

「いつ合はせたのだ。」

と、甲が聞きました。

「三日前だ。」

と、丙が答へました。

「それでも君の時計が後れる質なら、君の時計は、もう正しくはないだらう。」

と、乙がいひました。

「そんなことはない。僕は僕の時計を信ずる。」

丙はまたきつぱり、かう答へたあとで、甲に聞きました。

「正しい」

ドン　最近まで東京市に於て全市に正午を知らせるために發した砲聲の模聲語。

「信ずる」

「君の時計は何時だ。」

「一時十分過だ。」

「隨分進んでゐるね。」

と、丙が笑ひました。

「あゝ、僕の時計はあてにならない。」

と、甲がいひました。

「それでも、君は君の時計を、いつドンに合はせたのだ。」

と、乙が甲に聞きました。

「昨日だ。」

と、甲が答へました。

「昨日。それなら三日前にドンに合はせた丙の時計よりはあてになるかも知れないぢやないか。」

「あてにならない」

「うん。しかし僕には僕の時計は信じられない。なんだか違つてゐさうな氣がする。」

と、甲が俯向いて答へました。

「そんなあてにならない時計を持つてゐても、仕方がないぢやないか。」

と、丙が罵つていひました。

「僕の時計に合はせ給へ。」

「君のが合つてゐるなら、君の時計に合はせよう。」

甲はかういつて、自分の時計を丙の時計に合はせました。

「君の時計は何時だ。」

丙はまた乙に聞きました。

「かつきり一時だ。」

「信じられない」

「あてにならない時計を持つてゐても、仕方がないぢやないか」

「いつドンに合はせたのだ。」

「一昨日だ。」

と、乙が答へました。

「やはり進む質だね。」

「いゝや、僕の時計はどちらかといふと、少し後れる質なのだ。だから多分は一時五分過ぐらゐだらう。」

と、乙がいひました。

「そんなことがあるものか。それは違つてゐるよ。」

と、丙が笑ひながらいひました。

「うん、少し位は違つてゐるかも知れない。併し大した違ひはない筈だ。こゝから停車場迄はどのくらゐかゝるだらう。」

大した違ひはない

「二十分あれば澤山だ。だからまだゆつくりしてゐてもいい。」

と、丙がいひました。

「しかし今が一時五分過とすれば、あと二十五分しかないのだから、僕は一足先に出かけるよ。いづれ停車場で會はう。」

乙はかういつて出て行きました。

「氣の早い奴だ。」

甲と丙とは、かういつて笑ひました。

しかしそれから暫く經つて、甲と丙とが停車場へ行つた時、乙は二人にいひました。

「汽車はもう出てしまつたよ。僕は間に合つたのだが、君達を待つてゐたのだ。」

「一足先に出かけるよ」

甲と丙とは、驚いて顔を見合はせました。

「それでは、僕の時計は違つてゐたのかな。」

と、丙が顔を赤くしていひました。

「さうだ。君の時計は二十分後れてゐたのだ。僕の時計は十分後れてゐた。甲の時計があつてゐたのだ。」

「さうかなあ。」

と、甲がぼんやりしていひました。

「して見ると、君が一番利口だつたわけだね。」

「さうだ。自分を知つてゐる者が一番利口だ。時計は信じられる爲にあるものだ。信じなければ、それは何の役にも立ちはしない。間違つた時計を持つてゐて、それを信ずるのは固より悪いが、又どんな正しい時計を持つてゐても、そ

「丙が顔を赤くしていひました」

「『さうかなあ』と、甲がぼんやりしていひました」

「自分を知る」

れを信じなければ、間違つた時計を持つてゐるのと同じことだ。又何にも持たないのと同じことだ。間違つた時計を信ずる者も、正しい時計を信じない者も、なほ汽車に乗ることが出來ない。それは兩方とも馬鹿であるからだ。自分を知つて、信ずべきものを信ずる者だけが、汽車に乗ることが出來るのだ。」

乙はかういひました。

（孔子の歸國）

語ることの出來る人千人に對し、考へることの出來る人一人

考へることの出來る人萬人に對し、見ることの出來る人一人。

（ラスキン）

「信ずべきものを信ずる者だけが、汽車に乗ることが出來るのだ」

ラスキン
(1819—1900). 英國の文藝、藝術の批評家。

八　雲萍雜志抄

柳澤淇園

ある人、時刻を知らん爲にとて、自鳴鐘を求めんとするを、その妻之をとゞめていひけるは、「明けくれにかくる世話のみにあらず、くるひたる折からにはその隙を費し、自鳴鐘のために、かへりて時を失ふこと多からん。やめ給へ。」といへば、「さあらば雞を飼ふべし。」といふに、その妻又とゞめて云ひけるは、「時刻は人のうへにあり。汐の滿干もこれとおなじかるべし。自鳴鐘雞を便りとするは、勤に怠るもののいたすことなり。」と夫を諫め、つひに雞をも飼はずなりにき。

一休禪師、紫野におはせしころ、人の書をもとむるものあれば、「御用心」と書きて與へぬ。しひて他のことをもとむる者あれば、「御用心々々々々」と、いくつも書き給ひ、又上に、只といふ一字をそへて、「只御用心」とかゝせ給ふこともありとかや。いとおもしろく、その語すべての事にかよひて、教訓とはなりにけり。予もまたそれにならひて、用心の二字を合はせて、一字に作り書けり。その文に云ふ。

鳥渡見れば忍ぶに類し、麁忽に見れば恩にひとし、はるかに見れば思ふに似たり。

天龍寺の觀道といふ僧これを見て、「棄恩入無爲、眞實報恩謝」といふ文意に、何となくかよひてをかしといへり。

守邪とは、醫書の樞要にして、人の行ひにていはば、油斷せざ

柳澤淇園　名は里恭、字は公美。儒者。寶暦八年(一七五八)歿、年五十三。

雲萍雜志　四卷。柳澤淇園著「見聞漫錄」(一十卷)中から採錄補訂せるもの。

自鳴鐘

「時刻は人のうへにあり」

一休禪師　諱は宗純。禪宗の高僧。京都大德寺の住。文明十三年(一四八一)寂、年八十八。

紫野　紫野大德寺。今京都市上京區紫野大德寺町にあり。臨濟宗大德寺派の本山。開山は大燈國師、一休は第四十六世の寺主。

「只御用心」

鳥渡　忍　**麁忽**　恩　**はるか**　思

天龍寺　京都市右京區嵯峨に在る臨濟宗天龍寺派の本山。夢窓國師の創建。

棄恩入無爲　一切の煩惱を斷つて「悟」を開くこと。

「守邪」

るなり。よろづの事も、みづからゆるす所よりして、よからぬことは出で來るなり。甚だしく寒き時は、風邪にもをかされぬものなり。寒さのゆるみたる時に邪氣に感冒するにて知るべし。これはさゝいなることとゆるす時に、はや大惡のきざすもとと思ふべし。邪も氣のゆるむとき入るなり。されば小事を守らざるが大事の始とこそ思ふべし。古歌に、

かばかりの事は憂世の習ぞとゆるす心の果てぞ悲しき

（雲萍雜志）

心胸には道理に知れない道理がある。わたしたちは千百の事物に於て、その道理以外の道理を知る。

（パスカル）

＊邪氣に感冒する

パスカル (1623—1662). フランスの幾何學者哲學者。

九 茶話

薄田泣菫

細川幽齋はいろんなことに通曉してゐた。武術はいふに及ばず、その頃、古今傳授を受けたのは彼一人だつたのでも、歌の方の造詣もほゞ察することができよう。

幽齋が頓才があつて、歌の詠み口の早かつたことは、かなり名高い話である。ある時、わが子の三齋と連立つて、烏丸家を訪ねたことがあつた。主人の烏丸殿は細川が二人顔を揃へてゐるのを見て、

「細川二つちよつと出にけり」

といつて、ちよつかいを出された。すると、幽齋は卽座に、

「御所車通りしあとに時雨して」

薄田泣菫 名は淳介。詩人。明治十年生。

細川幽齋 名は藤孝。慶長十五年(一六一〇)歿、年七十七。

＊通曉 「古今傳授を受けたのは彼一人」

＊造詣

三齋 細川忠興の號。正保二年(一六四五)歿、年八十二。

烏丸家 藤原光廣をいふ。寛永十五年(一六三八)歿、年六十。

「卽座に」

＊御所車

とつけたので、烏丸殿も感心するよりほかには言葉がなかつたさうだ。その日、幽齋が暇乞ひして歸らうとすると、烏丸殿はわざ〳〵玄關まで見送つて出られたが、こつそり家來の一人に耳打をして、だしぬけに幽齋を後から玄關の式臺の上に突倒させた。そしてこの歌上手の老人が蛙のやうな恰好をして、まご〳〵してゐる間に、

「細川殿たつた今、一首所望いたす。」

と浴びせかけたものだ。

すると、幽齋は腰を擦り〳〵起きあがりさま、

「とんとつくころりと轉ぶ幽齋がいつの間よりか歌をよむべき」

と歌つたので、惡戯なお公家さんも手を拍つて嘆賞するより

*式臺

*所望

「起きあがりさま」

ほかに仕方がなかつた。

また、ある大名が幽齋を困らさうと思つて、どうぞ歌一首のうちに「ひ」の字を十入れて作つてほしいと、難題をいひ出した。幽齋はちよつと思案をしたが、こんな手品師のやうなことは平素仕馴れてゐるので、何の苦もなく、

「日の本の肥後の火川の火打石日々にひとふたひろふ人々」

と、詠んでみせた。大名はこりずに、また〳〵難題を出して、今度は、歌一首のなかに「木」を十本詠込んでみてほしいといひ出した。箱庭作りのやうに器用な幽齋は、何の造作もなく、有合はせの楢と橡と桐と櫧と柿と椎と松と杉と柚と桑とを詠込んで見せたものだ。

「何の造作もなく」

「何の苦もなく」

楢 七葉樹科の落葉喬木。一〇—三〇米の高さ。

櫧 葉繁き故の名と

すると、大名はぜんまい仕掛の玩具でも見せられたやうに、首を捻つて感心してしまつたといふことだ。

歌の話が出たから、これは幽齋ではないが、今一つ歌の話をつけ加へよう。連歌師の山崎宗鑑が、ある時さるお公家さまを訪ねたことがあつた。公家は宗鑑に、自分は近頃えらい發明をした。それは歌のどんな上の句にでも、くつ附けることの出來る下の句だと、出來ることなら農商務省に願ひ出て、專賣特許でも取つておきたいやうなことをいひ出した。宗鑑がどんな句だと訊くと、公家は自慢さうに、

「といふ歌はむかしなりけり」

といふのだと答へた。宗鑑は鼻の上に皺をよせて笑つた。

「御前、これはやつぱりお公家さまのお詠みになつた下の句

いふ。木蘭科の有毒常綠灌木。高さ約三米。

楢橡云々の歌 必ずと契りし君はきまさぬに強ひて待つ夜の過ぎゆくは憂し。

山崎宗鑑 天文二十二年(一五五三)歿、年八十九。

農商務省 大正十四年農林省と商工省に分る。

*專賣特許

「鼻の上に皺をよせて笑つた」

でございますね。私共の方ではちと趣向が違ひまして、かういふ下の句をつけます。」

といつて、「それにつけても金の欲しさよ」といふ句を書いてみせた。公家はそれを口の中でよんでみて、そしてそれを自分の知つてゐる古今集や百人一首のいろんな歌にくつ附けてみた。ところが妙なことには、この下の句はどの歌にもよく附いて、少しの縫目がみえなかつた。

「それにつけても金の欲しさよ。」

實際よく附くと思はれたのに不思議はなかつた。そのお公家さんは、貧乏な宗鑑と同じやうに金が欲しくて仕方がなかつたのだから。

(茶話全集)

*趣向

古今集 古今和歌集。二十卷。我が國最初の勅撰和歌集。

百人一首 天智天皇より順德天皇に至る百人の歌人の歌一首づつを撰び集めたもの。

「少しの縫目がみえなかつた」

「金が欲しくて仕方がなかつたのだから」

一〇 國旗

日の丸の旗が、始めて民間で用ひられたのは、明治五年九月十二日、東京・横濱間に當時陸蒸汽といはれた鐵道が開通した日からであると傳へられて居る。

その日、かしこくも明治天皇には親しく横濱驛に成らせられ、沿道の人々は手に日の丸の小旗を持ち、各戸には一齊に日の丸の旗がひるがへつたのである。太政官からは、豫め「聖意を奉戴してなるべく質素にお迎へするやう」といふ注意があつたので、横濱市民はいろ〳〵と奉迎の方法に就いて頭をいため、度々寄合つて協議をこらしたものである。その中に誰かが「西洋では、祝日や祭日にはよく國旗を掲げるといふから、

「始めて民間で用ひられたのは」

それにならつて、日の丸の旗を各戸に掲げるがよからう。」といひ出したので、衆議忽ち一決し、大急ぎで日の丸の旗を作ることになつた。

日露戰爭の時廣瀨中佐などと共に旅順閉塞隊に加つて戰死した白石葭江といふ中佐がある。この人がまだ大尉時代、明治三十三年北清事變の時の事である。

列國の聯合軍は北京へ乘込む目的で、太沽（タイク）砲臺を攻めにかかつた。イギリスがやつても駄目、イタリヤがやつても駄目、出るものも、出るものも、皆血みどろになつて退却する。最後に一番後に控へてゐたわが海軍の陸戰隊が出る事になつた。

この陸戰隊の第一中隊長が、勇猛音に聞えた白石大尉。「そ

「それにならつて、日の丸の旗を各戸に掲げるがよからう」

廣瀨中佐　名は武夫。日露戰爭の時朝日水雷長として閉塞隊を指揮し壯烈なる死を遂ぐ。年三十七。

白石葭江　日露戰役の時、第三回旅順口閉塞佐倉丸の指揮官として港口に赴き戰死す。年三十二。

北京　支那河北省の舊都。

太沽　河北省天津の東約四十餘粁、白河の河口に在り。

れつ」といふなり、大粒の彈丸雨の如き中を猛然と進擊した。そして各國の陸戰隊が唯々あつけにとられて、「あれよ、あれよ。」といつてゐる間に砲臺を占領してしまつた。眞先に立つた大尉は、劍を打振り〳〵「萬歲、萬歲。」と絶叫する。

第二陣にゐたイギリス軍は、わが軍に次いで砲臺に攀登つて來た。そしてその士官の一人は、豫て用意の英國々旗を取出して手早くこれを竿の先につけ、群がる占領軍の眼前に高高と掲げ出した。英國の國旗は血なまぐさい戰場の風に颯と飜る。

目ざとくこれを發見した大尉は、怒、心頭に發して、「旗！旗！」と叫びながら烈しくあたりを見廻したが、誰も國旗を持つて居らぬ。ぐづ〳〵して居れば、あたら同胞を犬死させた事に

「各國の陸戰隊が唯唯あつけにとられて、『あれよ、あれよ』といつてゐる間」

＊心頭

「ぐづ〳〵して居れ

なる。見よ。足もとには同胞の屍が累々と横たはつてゐるではないか。白石大尉は隼のやうに身を飜すや否や、有頂天で自國の旗をふつてゐる英國士官に對し、「無禮者！」と言ひざま猛烈な體當りを食はせた。不意をつかれた英國士官はばつたりと倒れる。

大尉はその隙にポケットから汗ににじんだハンカチを取出すが早いか、ぷつりと我が右手の藥指を嚙切つた。血汐は滾々と滴る。その血汐を以て見る〳〵ハンカチの眞中に大きな圓を描く。ハンカチは忽ち眞紅の日の丸に彩られる。と、すぐさまこれを劍の先へ突通して精一杯に捧げひらめかし、咽喉も張裂けんばかりの大音聲を揚げて、「萬歲！」と叫んだ。我が兵は涙を呑みながら萬歲を連呼した。聲も立てずに目

ば、あたら同胞を犬死させた事になる」

＊滾々「血汐を以て見る見る……大きな圓を描く」

を睟つてゐた列國の軍隊も、一齊に日本軍の萬歳に和した。

この事あつて後、各兵は必ずハンカチ大の日の丸をポケットに入れて進むことになつたといふことである。

乃木さんは日清戰爭後に那須野に退いて、こゝで暫く百姓生活をしてゐた。この頃東京へやつて來ると、きつと村の人たちに土產を買つて戻つたものである。

或年の暮には、三尺に二尺程の日章旗を小さな函に入れて村中の家々に贈つた。所がこの日の丸の旗に金廿錢宛がついてゐる。村の人達は、旗をくれた意味はわかるが、どうしてもこの廿錢がわからない。といつてまさか乃木さんの所へ聞きにいく譯にも行かない。とう〳〵有志が集つて會議を

「萬歳に和す」

乃木 名は希典。日露の役、第三軍司令官に補し、攻圍半歳にして旅順を陷る。後從二位伯爵に敍す。大正元年九月十三日薨、年六十四。

那須野 栃木縣那須郡西那須町。那須山麓。

「日章旗を小さな函に入れて……贈つた」

開き、智慧を絞つた末、「どうもこの廿錢は旗をたてる竿を買へといふことらしい。」といふことになつて、一同お揃ひでだんだらに塗つた旗竿を買つた。

乃木さんの庭には村のどこからも見えるやうな非常に高い旗竿が立つてゐて、旗をする〳〵と上げたりおろしたりするやうな仕掛になつてゐる。明くる年の元旦、日の出と共に、乃木さんの庭に日の丸が翩*翻とひるがへつた。村人は「それ」と言ふので、これまで國旗など揭げた事のない家も一齊に旗を出した。

乃木さんは、それから三大節はもちろん、日本人として誰でも祝はなくてはならない記念日などには、必ずこの旗を揚げる。それは例の村中どこからでも見える所だ。うつかり畑

* 翩翻

「揭げた事のない家も一齊に旗を出す」

へ出て働いてゐる人もこれを見ると、「そら乃木さんところに旗が揚つた。」といつて馳せ歸つてこの旗を出した。

乃木さんの旗は那須颪の空つ風に吹かれつゞけ、雨にも雪にも村民に先んじて竿頭高く飜つたので、遂に端の方三寸ばかりも吹きちぎられてしまつた。このちぎれた旗は今尙弟の大館集作氏の許に祕藏されて、乃木さんの思ひ出の一つになつてゐる。

乃木さんは祝祭日にどこかへ招かれた時に、もしその家に國旗が出てゐないやうなことがあると、無言のまゝ門前からてく〳〵歸つてしまつたもので、又片田舍へ行つて、小さな茶店などで忘れずに旗を出してゐると、「有難うございます。」と禮をいはれたといふ。

「有難うございます。」

も一つ、日の丸については記憶すべき話がある。

明治二十七年日清戰爭の當時、石黑軍醫總監が軍務上の用向で朝鮮まで出掛けた。膚をさすやうな空つ風のうちに夜はほの〴〵と明けて、空は快晴、一點の雲もない。今日は十一月三日、天長の佳節である。

處は兵站司令部のある兀浦（グリンポ）、司令官山縣少佐は日の出を待つて酒樽の鏡を拔き、鯣を山のやうに積上げて、心をこめた天長節の祝宴を開いた。各〻なみ〳〵と冷酒をついだ杯を手にして肅然と起立し、遙かに故國に向つて萬歲を三唱することとなつて、その音頭を石黑軍醫總監に賴んだ。

石黑總監は起つて、「手旗にする國旗はありませんか。」といい

石黑軍醫總監　子爵石黑忠悳。弘化二年生。

山縣少佐　名は俊信。日露戰役に常陸丸に搭乘して航行中、敵の襲擊を受け割腹して死す。年五十七。功により中佐に昇任せらる。

ふ。一同顏を見合はせたが、萬事不自由な戰場のこと、生憎そこには玩具の日の丸さへもない。突然一兵卒が「一寸お待ち下さい。私が拵へて參ります。」といつて出て行つたが、間もなく手にして入つて來たのは、半紙に日の丸を染めて、細い竹につけたものであつた。

會するもの總監以下兵卒に至るまで八十三名、總監はこれを受取ると、遙かに東に向つていとも高らかに、「天皇陛下萬歲。」と唱へた。一唱、二唱、涙は頰に傳はる。三唱し終つて、その感激に一同聲を放つて泣いた。

旗は卽座の機轉から、その兵卒が梅干の汁で粗末な半紙の眞中に日の丸を描いたもの、細い竹竿の尖には梅漬の紫蘇の葉をまるめた玉がつけてあつた。この旗はしばらく旭日に

「半紙に日の丸を染めて」

「聲を放つて泣く」

「梅干の汁で……梅漬の紫蘇の葉をまるめた玉がつけてあつた」

むけて兵站部の前に揭げてあつたが、やがて總監はこれを行李に納めて本國へ歸つた。

畏れ多くも明治大帝には當時廣島に大本營をお進めになつていらせられたので、石黑總監は御前に伺候した折に、お土產話としてこの梅干旗の事を御聞きに達した。天機ことの外うるはしく、「その旗を持參せよ。」との畏き御仰。やがてうやうやしくこれを天覽に供し奉ると、そのまゝ御卓の上に三日の間お置きになつて、再び總監にお下げになつたといふ。

（「日の丸由來記」による）

「天覽に供す」

一一　明治天皇の御遺物を拜す

笠井信一

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、定時に參内致しました處が、十一時すぎ權殿參拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後、一年間皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。卽ち私どもは此の度、先帝の皇靈を拜する特別の御恩典にあづかつたのでございます。そこで私どもは長い廣い御廊下に整列致しまして、宮殿奥深く權殿に詣つて、一人づつ最敬禮を致しました。蓋し其の瞬間は何人といへども、一種の靈感に打たれないものは無かつたでございませう。其の權殿と申すは、平素、皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て之に充てさせられたのでございました。

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。先帝には永くこゝに在らせられて、德教を御布きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられるなど、宏謨雄圖一に此の中で御定め遊ばされたのでございます。然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平常私どもが參内の節休息を許される御部屋の方が、却つて遙かに御立派である。而も餘り廣くない二間續きの御部屋であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も御椅子も實に御質素なもので、絨毯

笠井信一　貴族院議員。前縣手縣知事。昭和四年歿、年六十五。

先月　大正二年一月。

「權殿」

*詣つて

「御學問所」

*膺懲

*宏謨

*雄圖

*瀟洒

「御質素」

の如きは當初敷かれた儘のもの故、後には色も大分褪めて參りましたので、侍臣から御取換を屢〻願ひ出でましたが、御許しがなくて、遂に今日に至つたのださうでございます。

御部屋は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸があり、御机は御座所の中央に南向に御据ゑになつてあります。此の御構造を拜觀すると同時に、夏分は嘸御暑い事でいらせられたらうと感じましたが、先帝には御暑さの御厭ひもなく、連日此處に出御あらせられたのでございます。これにつけても、

年々におもひやれども山水を汲みてあそばむ夏なかりけり

の御製を思ひおこして、誠に恐懼に堪へませんでした。それのみならず、此の御部屋にはストーブの御設備がございますけれども、三十七年の冬以來御用ひがない。ひそかに承るに、其の年の冬の或朝、例の如くストーブに火が焚いてございましたが、先帝が出御遊ばすや否や、「火を消せ。」と仰せられる。侍從は何故か分りませんが、唯仰せの儘に火を消しました。さて其の後と申すものは、如何なる嚴寒にも一切ストーブを御使用遊ばされなかつたとの事でございます。これは勿論大御心を伺ひ奉る譯には參りませんが、侍從方の推測し奉る處によれば、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戰ひ、飢寒に苦しんでゐるのに御同情を垂れさせられ、兵士と艱難を共に遊ばさうとの大御心に出でさせられた次第であらうと申すことでございます。それ以來は、小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事。今其の御火鉢を拜觀するにつけても思ひ出

*「火を消せ」られる

されるのは、斯民の上を思ひやらせられた御製、

桐火桶かきなでながら思ふかなすきま多かるし

づがふせやを

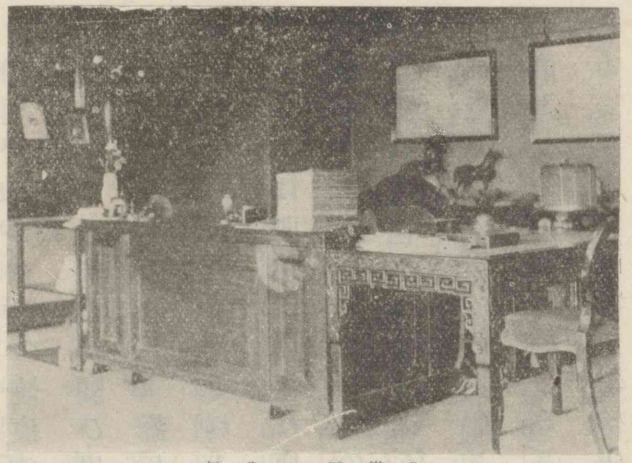
でございます。

此の御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。此の御部屋には、先帝の御學問所で御使用になつた御遺物全部其の儘に据置かれてございます。是は今上天皇陛下の大御心に出でさせられた趣に拜承致しました。構造も方向も廣さも御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も、昨年七月十三日卽ち先帝最後の出御當時の儘に、御備附になつてございました。床の間には其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には數振の御劍が置かれ、御机は中央に南面し

「別室の拜觀」

今上天皇陛下　大正天皇。

てございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなどは思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許しを蒙つて、仔細に拜觀する光榮を得ました。



御常用の御机

まづ御机は羅紗を鏡張りにしたテーブルで、中程に燒痕がございます。是は先帝が御煙草を召上つていらせられた節、臣下より政務を言上致しました處、先帝には御吸掛けの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせ

「羅紗を鏡張りにしたテーブルで、中程に燒痕がございます。」

＊言上

られた折、煙草が墜ちて此の燒痕がついたのだと申す事で御座います。さて此の燒痕のあるテーブルの羅紗を御取換申し上げる事を幾度か願ひ出でましたけれども、斷じて御許しが無かつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉德の至りと拜察し奉ります。

御硯箱は明治二十年に鹿兒島縣から御取寄せになつた竹製の品でございます。其の中の筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物とかはらないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えない程に御使ひふるしになり、墨も亦同樣で、一寸位に磨りへらされた品でございました。鋏も同じく普通市場にある品で、其の傍に、學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍從の方が何かの調べに用ひた儘、其處

「御硯箱は……竹製」

「筆は……毛尖は禿び、軸の文字は見えない」

「墨も亦同樣で、一寸位に磨りへらされ」

に置忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと承つて、今更ながら御儉德の高きに感激し、自ら省みて慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてございます。これは一時赤阪假皇居に御出で遊ばされた頃から久しく御使用になつた物で、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れる樣になりました。そこで御取換を願ひ出でましたが、「なに、宜しい。」とて御許しが無い。せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許しを得た。併し適當の皮が無い事を言上致しました處、何の皮でも宜しいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申す事で、侍從が、「此の邊が犬の皮です。」と說明して居られました。

其の傍にホワイトシャツを入れる白いボール箱やうの物

「御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてございます」

一時　明治六年五月皇居炎上の後。

「なに、宜しい」

が澤山積重ねてございましたから、何に遊ばす物かを侍從に尋ねました處、やはりシャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとて、御手許に留置かせられたのであるとの事でございました。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れ、表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は別の紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は一枚たりとも御棄て遊ばされず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのでございます。實に天下の物は、用ひるに其の途を以てすれば、一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞し召されながら、一枚の反

「シャツの空箱」

「紙袋は……御詠草に」

御歌所　宮内大臣の管理の下に、御製・御歌及び御歌會に關する事務を掌る所。

故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は務めて御節約相成り、聊かにても冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。

一天萬乘の大君におはしながら、禿びた御筆を御用ひになり、破れた敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召で入らせられませうか。皆是れ節すべきを節して、有用の事にのみ御用ひ遊ばさうといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

御次の間には、造花や彫刻や種々な御品が備へてございました。之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、

「節すべきを節して有用の事にのみ……大御心」

「御次の間」

御奬勵の爲に御持歸り又は御買上げにならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に、造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪め果てて殆ど裝飾の用をしないものまで、其の儘になつてございます。其の他、美術工藝品の御買上げも、皆御奬勵の爲で、俗人の道樂とは全く趣を異にしていらせられます。御製に、

千萬の民と共にもたのしむにますたのしみはあらじとぞおもふ

とございますが、實に此のやうな御樂しみを求めさせられる爲に、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御蔭を以て隆々

「御奬勵の爲に御持歸り又は御買上げにならせられた」

「御心づくしの御蔭

として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば我等は長い間、聖天子御一人に、非常の御苦勞を御掛け申し上げましたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に、

國民の業にいそしむ世の中を見るにまされるたのしみはなし

の御製をも同時に服膺して、公人としても私人としても、力のあらん限りを盡くし、以て我が日の本のかための爲、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございます。（嚴手縣學事彙報）

を以て隆々として興り」

「應分の貢獻」

三 星の名

野尻抱影

ななつ星は北斗七星の和名として如何にも自然である。そしてみつ星、むつら星(すばる)などと共に古くから行はれてゐたものに相違ないが、文獻としては、和歌に、その名が見えてゐる程度に留まる。その和歌は

北にすむ七つの星ぞくるとあくと、めかれず君を猶守るなる　(宗良親王　寄星祝)

夜や寒き七つの星のすむかたも、むかへるさとも衣うつなり　(堯孝　南北擣衣)

である。類聚名物考、天文部の星名にも、「北斗星、ななつぼし」となつてゐる。

野尻抱影　名は正英。文學者。明治十八年生。

むつら　六つ連なつて見えるための和名。

＊文獻

宗良親王　後醍醐天皇の皇子。護良親王の御弟。新葉和歌集の撰あり。

堯孝　歌僧。頓阿法師の曾孫。康正元年(一四五五)寂、年六十五。

類聚名物考　三四二卷。山岡浚明の著。和漢の書から事物の名目及び出典を抄出したもの。

現代では、ななつ星の分布は殆ど全國的である。

すばるの文獻として、すぐ思ひ出されるのは、枕草子である。しかし辭書では、更にそれに先ち、朱雀天皇の承平年中源順撰にかゝる倭名類聚抄に見えてゐるのである。更にその語源の解つてゐるものからいへば、すばるは、星の和名の最も古いものゝやうである。

御統(みすまる)は、私たちが神代の風俗畫でよく見る玉飾である。古事記上十九にはまた美須麻流(みすまる)の字を當て、萬葉集にも須賣流(すめる)玉といふ句がある。此のすまるが中古にすばるにも轉訛したのだらう。醍醐天皇の朝延喜六年、日本紀竟宴歌に

天穗日命「天」穗日の神の御祖は、八尺瓊(やさか)の五百津儒波(いほつるは)屢の

枕草子　平安朝中期に於ける清少納言の隨筆。

朱雀天皇　第六十一代天皇。御在位(一五九〇—一六〇六)天暦六年(一六二)崩御、御壽三十。

承平　(一五九一—一五九五)

源順　字は具濟。歌人。永觀元年(一六八三)歿、年七十三。

和名類聚抄　十卷或は二十卷。順撰。萬葉假名で記された我が國最初の辭書。

＊和名

古事記　三卷。元明天皇の和銅五年(一七一二)太安麻呂勅を奉じて、語部の稗田阿禮の諳誦せる神代より推古天皇の朝に至るまでの傳說・歷史を記錄したもの。

玉とこそ聞け」

として、既にすばるになつてゐる。倭名抄はそれから約三十年後に編まれた書物である。しかし、すまるもすばるも竝び存してゐたことは、たとへば貝原益軒の日本釋名に「昴」とあるし、今言はれてゐる星名にも、むしろすまるの方が多いことでも證左となるだらう。そして、星の名が此の玉飾から出てゐるのだとすれば、無論日本紀よりも古事記よりも古く、これを裝身具にしてゐた上古に生まれた名であるに相違ない。そして、すまる、又は、みすまるであつたのであらう。

今の私たちには、すまる又はすばるの名は、はつきりした語感は摑めない。しかし比喩からは實に美しい、そして珍しい豪華な星名である。上古の王子や貴族が、自分たちの頸にか

萬葉集　二十卷。仁德天皇の朝より淳仁天皇の朝に至る四百餘年間の和歌四千四百九十六首を漢字の音訓を以て記錄したもの。撰者未詳。

醍醐天皇　第六十代天皇。御在位（一三吾—一三九〇）同年崩御、御壽四十六。

延喜六年（一三六〇）

日本紀竟宴歌　二卷。日本書紀の講義終つて後、催される賜宴の歌を集めたもの。

貝原益軒　名は篤信又損軒とも號す。儒者。正德四年（一三一四）歿、年八十五。

日本釋名　三卷。益軒著。語源辭書。

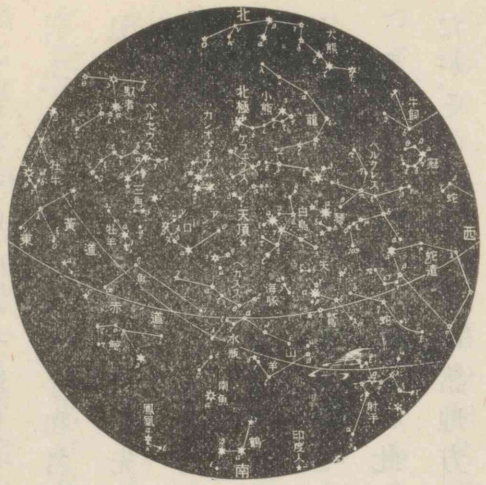
＊證左

日本紀　日本書紀。三十卷。元正天皇養老四年（一三八〇）五月成る。舍人親王・太安麻呂・紀清人等勅を奉じて撰す。神代より持統天皇の朝までの傳說・歷史を漢文にて記す。六國史の一。

＊語感

＊比喩

けたり、髻に垂れた玉飾の形を星空に發見して、その名で呼んだのである。



星圖

からすき星は、みつ星の異名として恐らく最も古いものと思はれるし、農耕の國日本を代表する星名として最もふさはしいものである。すばる星を、その語源から貴族趣味の和名とすれば、からすき星には正に土の香を、それも青垣こもれる大和國原のそれを、私に空想させる。正倉院の御物にも、子の日の目利箒と

＊貴族趣味

「土の香」

「青垣こもれる大和國原」

正倉院　奈良市舊東大寺境内、大佛殿の西北にある。聖武天皇の御遺物その他の貴重の物品を藏む。

手辛鋤がある。

さかます星はみつ星とその附近の星々とが描く正方形を言ふ。まことに朗かな和名であり、星の形としても全天稀に見る整齊美である。私は先ごろ外國の或星圖にも同じ星の結び方をしてゐるのを見たが、特殊の名はなかつた。その時も私は、初めて此の星象を發見し、そしてそれに酒桝の形を思ひ浮かべた無名の日本人をゆかしく感じたことだつた。

私は初め、西讃岐地方に此の名が行はれてゐることを聞いたが、その後年と共に諸地方からの報告に接して、今では南は熊本地方から、北は秋田地方にも及び、殆ど全國的であることを知つた。殊に東北の朝日岳の北、東田川郡大鳥部落で獵人

「全天稀に見る整齊美」
「星の結び方」
＊星象
「無名の日本人」
西讃岐 香川縣の西部地方。
朝日岳 新潟・山形兩縣に跨がる山。海拔一八七〇米。連峯をなし、東北アルプスの名あり
東田川郡 山形縣。

たちの間に、むつらと共にさかます星の名の唱へられてゐるのを知つたことは深い滿足である。

しかし、さかます星の和名の最も似つかはしいのは、何といつても、瀬戸内海の沿岸であらう。

私は灘六鄕の竝倉の露地を通して花曇りの海がどんよりと見え、燕が縫ふやうに飛んでゐた思ひ出から、その空にさかますさんが鮮かに懸り、倉々から杜氏たちの歌と、まぜ棒がコットリコットリ大樽を攪きまぜる音が聞えてゐる初冬の夜を空想する。そして杜氏が多く小豆島初め內海の島々から出る話を聞くと、さかます星の名も初はこれらの島々から生まれ、次第に諸國に擴まつたとも考へたいのである。

（日本の星）

＊似つかはしい
灘六鄕 兵庫縣の大阪灣北岸、東方は武庫川口より西方神戸市生田川口に至る海岸地帶の總稱。灘酒の釀造地として著名。
＊どんより
「さかますさん」
小豆島 香川縣小豆郡に屬する瀬戸內海の大島。醬油の名產地。

一三 國字四書

出羽國米澤上杉氏の家臣黑井四郎左衞門の娘に繁乃といふ者ありき。七歳にして父を失ひ、母の膝下に人となりしが、後、夫を迎へて一子信藏をまうけぬ。然るに間もなく夫病に臥して、心をこめたる看護のかひもなく、遂に歸らぬ旅に出立ちたり。繁乃時に年僅かに二十。齡一つのみどり子を抱へし上に、年老いたる母のあるあり。殊に主二代まで引續きて早世しければ、自ら食祿も減ぜられて、生計にも事缺くこと多かりけり。されど繁乃はよく此の困難に堪へ、或は羽織のひもを組みて町に賣り、或は機織・絲繰などして僅かの賃錢を得、よく母に仕へ子を慈むこと年重りければ、遠近の人々こを聞

四書 大學・中庸・論語・孟子。

出羽國米澤 山形縣

上杉氏 會津を領せし上杉景勝は關ヶ原役に德川家康に抗したゝ爲、米澤三十萬石に轉封され、以來代々米澤を統治す。後更に削封さる。

「歸らぬ旅」

＊みどり子

＊早世

傳へて、ほめ感ぜぬ者はなかりき。

信藏七歳の頃、繁乃、隣家なる糟谷某に就きて四書を學ばしめき。されど我が身は僅かに假名文字を知れるばかりなりければ、「子を賢からしめんとせば、己先づ賢からざるべからず。我文字に明かならずして、いかでか我が子の誤れるを正し、疑はしきを明らめ得べき。今より學ばんも遲からじ。」とて、其の後は信藏のもの學びに行く毎に、己も亦隣家の窓のもとに立ちつゝ、もれくる師の聲を聞くがまに〳〵假名もて密かに書寫しぬ。斯くて信藏歸り來て復習する時、「此處は斯く〳〵と改めよ。其處はしか〴〵と讀まんぞ正しき。」と、絶えず傍にありて敎へ導きしが、斯くすること二年ばかり、遂に四書を悉く寫し果てたりとなん。

「子を賢からしめんとせば、己先づ賢からざるべからず」

「今より學ばんも遲からじ」

其の後信藏は藩の學校興讓館に入りしが、常に深く母の苦心を心にしめ、拮据勉勵少しも怠ることなかりしかば、學業大いに進み、後には重き職に就くに至りぬ。信藏、彼の假名書きの四書の、一字一句母が心血のこもれるものなるを、空しく紙魚のすみかとなさんを惜しみ、强ひて母に請受けて「國字四書」と名づけ、喜ある毎に先づ此の書をいたゞきて、厚く其の恩を謝したりとぞ。此の書今も傳へて其の家にあり。

「世の中に思あれども子をこふる思にまさる思なきかな」とか、子を思ふは人の親の常とはいひながら、斯くばかり眞心もて其の子をおふし立てしもの、思ふに世には少なかるべし。あはれ此の繁乃こそ母の鑑ともいふべけれ。

（高等小學讀本 卷二 女子用）

興讓館 安永五年に上杉治憲（鷹山）が再興命名したもので、明治初年に廢せられた。

＊拮据

＊心血

世の中にの歌 土佐日記、一月十一日の條に出づ。

「子を思ふは人の親の常」

＊おふし立つ

「母の鑑」

一四 樂訓

貝原益軒

天地の御惠をうけて人となり、天地の御心をうけて心とせし人にしあれば、天地の御心にしたがひ、我が仁心を保ちて、常に樂しみ、溫和慈愛にして情ふかく、人をあはれみ惠み、善を行ふを以て樂しみとすべし。人の惡を戒めんため、怒り詈るは、已む事を得ざればなり。常には和樂にして、其の氣を養ふべし。されど又和に專一にして禮なければ、一偏に流れ亂れて樂しみをうしなふ。

人のうれひ苦しみを慮りて、人の妨となる事を施すべからず。常に心にあはれみありて、人を救ひめぐみ、かりにも人を

貝原益軒 名は篤信。又損軒とも號す。儒者。正德四年（一七一四）歿、年八十五。

「天地の御心をうける」

「人の妨となる事を」

妨げ苦しむべからず。我ひとり樂しみて、人を苦しむるは、天の惡み給ふ所、おそるべし。人と共に樂しむは、天のよろこび給ふ理にして、誠の樂しみなり。

人を恨み怒り、自らほこり、人をそしり、人の小なる過をせめ、人の言をとがめ、無禮をいかるは、其の器小なり。是れ皆樂しみを失へるわざなり。怒と欲とをこらへ、心を廣くして、人を責め咎めざるは、器大なるなり。是れ和氣をたもちて、樂しみを失はざる道なり。

心こゝに在らざれば、見れども見えず、目の前にみち〳〵て、樂しむべき有樣あるをも知らず。春秋にあひても感ぜず、月

「誠の樂しみ」

「怒と欲とをこらへ、心を廣くして、人を責め咎めざるは……樂しみを失はざる道」

「心こゝに在らざれば、……樂しむべき有樣あるをも知らず」

花を見ても情なく、聖賢の書に向ひても好まず。唯、私欲にふけりて身を苦しめ、不仁にして人を苦しめ、さがなく賤しきわざをのみ行ひて、わづかなる命の内を、はかなく月日を送ることを、をしむべし。

心明かにして、世の理をよく思ひ知り、物に情あらん人は、我が心にある樂しみを知りて本とし、身の外、四の時、折々につきて、天地陰陽の道の行はるゝをもてあそび、天地の内なる萬のありさまを見聞くに從ひて、耳目を悅ばしめ、心を快くし、其の樂しみ、極りなくして、手のまひ足のふむ事を知らざるべし。

世の人、まどしくしては憂ひ苦しみ、富貴をうらやみて樂し

「我が心にある樂しみを知りて本とし」

* まどしく

みなく、富貴にしてはおごり怠りて、欲をほしいまゝにし、財をつひやして樂しみを求むれど、欲にやぶられて、かへりて自らくるしみ、人を苦しましむ。すべて富貴も貧賤も、其のねがひ外にありて、内に道を得ざれば、苦しみのみにて樂しみなし。

もし此の理を知れらば、身の上につきて樂しみ、外を願ふべからず。貧賤にしても、患難にあひても、時となく所として、樂しみあらずといふ事なかるべし。坐には坐の樂しみあり、立には立の樂しみあり、行にも、臥にも、飲食にも、見るにも、きくにも、ものいふにも、樂しみあらずといふ事なし。樂しみはもとより心に生まれつきて、身にそへるものなればなり。されど此の樂しみを知りて樂しむ人すくなし。理くらければ樂しみを知らず、欲ふかければ樂しみをうしなふ（樂訓）

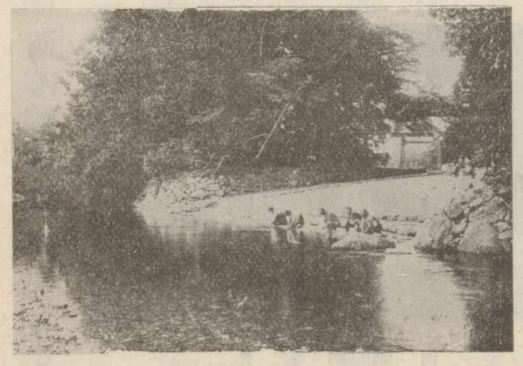
「富貴も貧賤も、……内に道を得ざれば」

「理くらければ樂しみを知らず、欲ふかければ樂しみをうしなふ」

一五 伊勢參宮

五十嵐　力

俄に參宮を思ひ立つて、きのふの夕八時に東京を立ち、けさ十時に山田に着きました。まづ外宮を拜んで、次に内宮を拜みました。兩宮の神々しさ、殊に内宮の畏さは言語につくせません。五十鈴川の清き流に、水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく口をすゝいで、それから頭上の木の枝を透して空を仰ぎ、名も知らぬ鳥の奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、綠青色の苔に寂びた神杉の太い幹が、天を支へる柱のやうに立並ん



五十鈴の流

五十嵐　力　文學博士。早稲田大學教授。明治七年生。

山田　三重縣宇治山田市。

外宮　豐受大神宮。

内宮　皇大神宮。

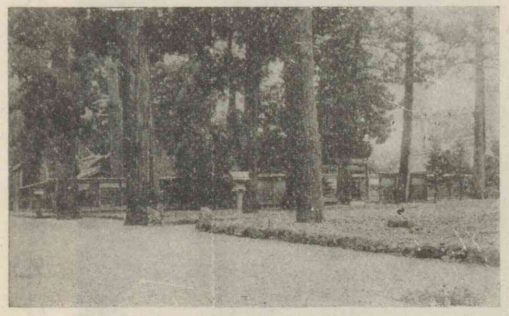
「畏さ」

「水底の小鮎の數を讀みつゝ」

＊綠青色

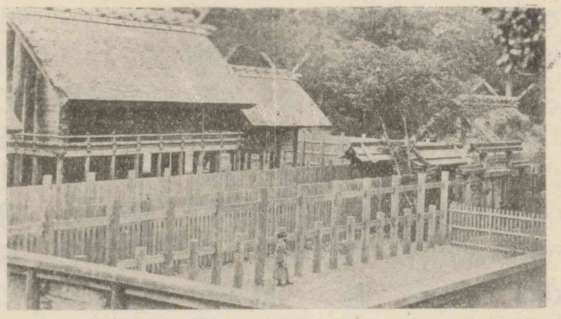
「天を支へる柱のやうに」

でゐる間をたどつて暫く進むと、やがて木立の奥、塀の彼方に、千木・堅魚木の金色が拜まれます。更に進んで塀の内に入ると、正面の御門には、白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に搖られ、その奥に疎らに立つた神杉に護られて御白石のぎつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の御宮が拜まれます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さい祈を捧げました。



外宮御側面

さうして傍に並んでゐた老爺や老婆が、拍手を打つては、溜息まじりに高聲の祈願を繰返すのに聽入りながら、現の間に西行法師が、忝さに涙をこぼして額づいた、敬虔な姿を思ひ浮かべました。



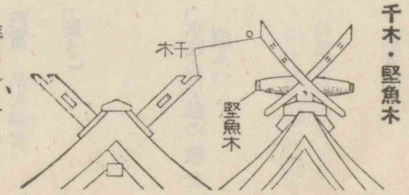
内宮御後面

直き清き強き心をあらはして

すく〳〵立てりたふと神杉

神宮は「單純」といふものの偉大さを極度に表現したやうに拜まれます。さうしてこの御社の神杉は、樹木の神しさを極度に表はしたもののやうに思はれます。

私どもは内宮の御後の神杉の根方から、一片の苔を採つて、押戴いて懷に し、御手洗川に口すゝいで、をりしも聞ゆる笙・篳篥の幽寂な雅樂の音に送られて、この神境を辭しました。さうして、かへり



千木・堅魚木

＊拜まれます

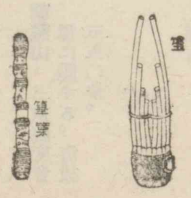
＊拍手

＊高聲

西行法師　もと佐藤義清といつた。有名なる歌僧。建久元年（一八五〇）寂、年七十三。

「『單純』といふものの偉大さを」

笙・篳篥



＊雅樂「幽寂な雅樂の音に送られて」

みかへりみ宇治橋を渡つて、昭憲皇太后の愛で聞し召したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それから車を命じて、田圃路の五十九町を志摩境の名山、朝熊山に走らせました。

御社のうしろの御門をろがみてひとかけの苔いたゞき歸る

神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の流に肥された田圃路を車に搖られながら、私はこの神境が大神の大御心にかなつた謂れを考へました。

大神宮儀式帳に、

『度會の國は朝日の來むかふ國、夕日の來むかふ國、涙の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞆の音聞かぬ國と、大御意鎭ります國と悅び給ひて、大宮定めまつりき。』

宇治橋 五十鈴川にかけた橋。長さ約一〇〇米。

朝熊山 三重縣度會郡に屬する。海拔五五〇米。

神路山 かむぢやま。內宮の神苑を繞る鬱蒼たる山林。

御裳濯川 みもすそがは。五十鈴川をいふ。

大神宮儀式帳 二卷。「大御心にかなつた謂れを考へました」伊勢の內・外宮から朝廷に奉つた注進書。

とあるのを見れば、第一には、山水の景色のたぐひなきを愛でさせられたのであらう。第二には、地勢・氣候・風土のうるはしきを愛でさせられたのであらう。第三には、この土地に永久な平和の可能性のあることを愛でさせられたのであらう。

最後には、一切の消極的煩累に煩はされずして、皇御孫に率ゐられる大和民族の積極的・光明的發展を見そなはすに都合のよい、氣の落着く境と思はせられたのであらうなどと考へながら、をり〳〵車夫の饒舌に氣を轉じてゐる中にいつか朝熊山の麓に着きました。

（我が書翰）

＊消極的煩累

＊饒舌

一六　敬神の情

杉浦重剛

古來我が國にては、大小の神社殆ど無數に存在して、八百萬の神々を奉祀し、上は皇室より下萬民に至るまで、常に敬神の誠意を表して怠らざりしなり。

抑〻我が國にて神といふは、上は我が皇祖天照大神の御神德昭々たるを崇めまつり、其の他歷代天皇の御聖德高き方々、下は人臣にして猶ほ且つ忠孝の模範となれるものを敬ひ、神として之を祀れるなり。故に八百萬の神々と稱するも、要するに人君及び人臣中の神秀なる人々を祀れるものに過ぎざるなり。彼の外國の宗教にて假定的に設けたる神佛とは、全然其の性質を異にするものなること、亦言を俟たずして知るべ

杉浦重剛　教育家。國學院大學學監。大正十三年歿、年七十。

「八百萬の神々」

＊神秀

＊假定的

きなり。

佛教及び基督教國民の如きは、概して未來の幸福を求めんが爲に信心するものなれども、我が國上下敬神の情は決して此の如きものにあらず。唯子孫として祖先を祭り、以て報本反始の誠を致すの他あらざるなり。言を換ふれば「慎終追遠民德歸厚矣」の意なり。

杉浦重剛

「報本反始の誠」

昔神武天皇皇祖の御偉業を繼ぎ給ふや、先づ强賊を討平し、都城の地を撰び、皇后を册立し、制度を立て、更に功を論じ賞を行ひ給ひて、國家の經營略成るや、四年春二月、詔して宣はく

我が皇祖の靈、天より鑒光を降し給ひて、朕が躬を助け給へ

＊肇造

＊册立

＊鑒光

り。今諸〳〵の虜ども已に平ぎ、海内無事なり。以ちて天神を郊祀て用て大孝を申べ奉るべし。

と。乃ち靈時を鳥見山に立てて以て皇祖天神を祭り給へり。

つら〳〵此の祭祀の意義を按ずるに、曾て天照大神が皇孫瓊瓊杵尊を我が大八洲に降し給はんとするや、勅して宣はく

豐葦原千五百秋の瑞穗の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就て治せ。　さきくませ。寶祚の隆えまさむこと、當に天地と窮無かるべし。

と。皇孫は此の神勅を奉じて、大八洲に降臨し給ひ、九州に在りて三代相次ぎ國土を經營し給ふと雖も、未だ大いに其の志を爲し給ふこと能はざりき。四代神武天皇に至りて、始めて中原を平定し、我が國家の體制を立て、天下を統御し給ふこと

「海内無事」

＊靈時

鳥見山　奈良縣生駒山の東麓。

瓊瓊杵尊　天忍穗耳命の御子。

「豐葦原千五百秋の瑞穗の國」

「國家の體制」

となりぬ。是れ曾て賜はりたる神勅に從つて、大事を遂行し給ひたるものなれば、天皇は鳥見山に祭祀して、以て皇祖を祭り、其の子孫として大孝を申べ給ひたるものなり。換言すれば、祖先の志を遂げて、之を其の靈に奉告し給ひたるものなり。

鳥見山の祭祀は頗る重要なる事實にして、是に依りて以て祭祀の意義如何を知ることを得べし。彼の外國の宗教が地獄極樂を說き、其の信者は專心一意に死後の幸福を祈請して已まざるが如きは、我が國に於ては曾て無かりし所なり。西行法師が伊勢の神宮に參拜して、「何ごとのおはしますかは知らねども忝けなさに涙こぼるる」と詠じたるが如きは、吉凶禍福に何等の關係もなく、唯法師が心底に伏在せる敬神の情の直ちに流露したるに外ならざるなり。

＊奉告

西行法師　第九十二頁註參照。

＊流露

更に一歩を進めて考ふるに、外國にては宗教と國家とが互に相背きて衝突を來すことあり。例へば、宗教上の主權者たる羅馬の法皇と、政治上の主權者たる皇帝とが、多年に亙りて非常に烈しく相爭ひたるが如きもの是なり。然れども、我が國に於ては、更に此の如き憂なきのみならず、却つて祭政の相一致するを見る。是れ抑、何の所以ぞ。

我が國の神々は我等の祖先なり。故に之を祭ることは、唯子孫として孝心を致すを以て本意とすること前述の如し。今此の理を推して考ふるに、能く祖先を祭らんには、たゞ一定の時日に儀式的の祭禮を行ふを以て足れりとすべからず。假に之を一家に譬へて言はんに、祖先の殘したる家は、其の子孫能く之を守り、能く之を擴張せざるべからず。而して後能

*主權者

「祭政の相一致」

く其の祖先を祭ることを得べし。一國に於ても亦然り。祖先が心血を傾けて經營したる國家をして、若し衰微せしむることあらば、何を以てか祖先を祭らん。故に飽くまでも奮進努力して、以て之が昌榮を期せざるべからず。是れ實に見易きの道理なり。

近時人々は多く武士道を談ず。武士道固より尊ぶべきものなり。然れども武士道以前に在りて、しかも我が國人の精神の根本をなすものは敬神の情なり。歴代の天皇の能く政に勵み能く民を憐み給ふも、亦臣民が常に忠勇の心を磨くも、其の淵源する所實に此に在り。

（倫理御進講草案）

*昌榮

「武士道」

「我が國人の精神の根本をなすものは敬神の情」

*淵源

一七 音

宮城道雄

私は音によつて、物の色や形などを思ひ浮かべることが出來る。私は目で見る力を失つたかはりに、耳できくことが、殊更鋭敏になつたのであらう。音についてはいろ〳〵と深く考へることが多いのである。

音と色とは離れることの出來ない關係をもつてゐるのだと、私は思ふ。音には白い音、黑い音、赤い音、黃色い音といふやうに、いろ〳〵な音がある。白い音をきくと、單純さや聖人や僧侶などを思ひ浮かべるし、黑い色の音をきくと、暗黑や惡人などを想像するのである。このやうに、一つ〳〵の音には、矢張り性格や色彩があるのだと、私は思つてゐる。

私は作曲する時には、メロディに重きをおいて、表現したいと思つてゐるが、ハーモニーは、この音の色といふことを考へて、效果をあげるやうに心がけてゐるのである。湖を現さうと思ふ時には、私はメロディとそのハーモニーとによつて、あの透通るやうな、碧い色を思ひ浮かべるやうな音をつくり出すことを考へてゐるのである。又秋の氣分を出さすためには、淋しいメロディと共に、枯葉の散る秋の色を決して忘れない。

世界中で同じ人相がないのと同樣に、聲もまた、人々によつて皆違つてゐる。强弱、清濁、高低、ひからびた聲、潤ひのある聲、甘つたるい聲、粗野な聲など千差萬別である。その聲の調子

宮城道雄 音樂家。東京音樂學校教授。明治二十七年生。

「白い音」

「黑い色の音」

「音には、矢張り性格や色彩がある」

メロディ 旋律。曲。

ハーモニー 和聲。諧調。

によつて、その人の性質なり顔の形がわかるのである。殊に性格はよく聲に現れる。そして、その時の表情なども大かたは聲で想像出來るのである。肥つた人と瘠せた人の聲は非常に違ふし、頭のよし惡しも聲をきけば、大抵わかるやうである。又、同じ人でも、心に惱がある場合は、どんなに快活な聲を作つてゐても、すぐわかるものである。よく「お顏の色が惡いがどうかなさいましたか」といふが、私なら「お聲の色が惡いがどうかなさいましたか」ときゝたいところである。

人にあつて話をする時も、相手の人の近くに寄つてゐれば、その人の態度やもの腰も手にとるやうにわかる。その人が話の最中に、ふと外の事を考へたり、目を外らせたりすれば、直ぐ聲の調子に變化が來るので、私はそれがわかるのである。

「性格はよく聲に現れる」

「お聲の色が惡い」

＊もの腰

私の住んでゐるところは、省線までよほど離れてゐるけれども、雨が降る前とか、天氣の惡い時などには戸外の物がはつきりときこえて來る。遠くを走つてゐる省線電車の音がきこえる時は、雨だなと思ふのである。

それぱかりではなく、三味線の絃や、箏の絃でもわかる。絃がしめつて來るし、それに音も冴えなくなる。今日は天氣がよいが、二三日のうちには雨になるといふことも、大抵豫想が出來る。

朝の氣持、晝の氣持、夜の氣持は、目に見えなくとも、色々の物音や周圍の空氣で、私にはそれと感じられるのである。

自然の音は、自分が音樂をやつてゐるだけに、最も親しいものである。同じ風でも松風の音、木枯しの音、又、撫でるやうな

柳の風、さら〳〵と音のする笹の葉など、一つ〳〵に趣のあるものである。

私は雨の音が好きである。取りわけ春の雨はよいもので、軒から落ちる雨だれの音などきいてゐると、身も心も引入れられてしまふやうな感じがする。

海の遠く鳴る音、瀧の音、小川の流、谷川のせゝらぎ、水車の靜かに軋る音などは何れも趣のあるものである。

自然の音は全く、どれもこれも音樂でないものはない。私たちがどんなに努力しても、あの一つにも勝れたものは出來ないであらう。

私は又、小鳥が好きで、都の中に住んでゐると、自然の森や林で自由に囀る鳥の音をきかれぬことは淋しい。私は作曲に

「身も心も引入れられてしまふ」

「自然の音は……音樂でないものはない」

感興が湧いて、自然の音にひたりたいと思ふ時などは、ゐても立つてもゐられない程、懷かしい思ひがする。

毎年正月になると、私の家の庭先へ、一羽の小鳥がやつて來る。それは去年も一昨年もその前の年にも來たのと、同じ小鳥なのである。

併し、私の家の者は誰も、それが毎年來る同じ小鳥であるといふことには、氣がつかない。これは、たゞ私だけが知つてゐるのであつて、私はその小鳥の囀る聲をきいて、今年も亦正月を祝つてゐるのだな、と何となく嬉しいやうな懷かしいやうな氣持になる。

目の見える家の者たちが知らない小鳥を、目の不自由な私だけが知つてゐるのは、をかしい話であるけれども、それは、私

は小鳥を目で見ないで、耳で鳴聲をきいてゐるからである。毎年同じ音色と調子で囀るのをきいて、私にはそれが前年と同じ小鳥だといふことがわかるのである。

このやうに、私たち盲人は、たゞ音の世界にばかり生きてゐるのである。これは目明きの人から見ると、如何にも不自由な世界のやうに思はれるかも知れないけれど、傍で考へてゐる程、不自由でも淋しいものでもない。

（騒音）

「音の世界にばかり生きてゐる」

一八 近江聖人の幼時

村井弦齋

雪ならば幾たび袖を拂はましはなの吹雪の滋賀のやま越

それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の、眺も飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を沒し、凛冽たる風は膚を裂く。

辛苦の中に滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景、辛崎の松は暮靄朦朧の間に隱れて、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴渡る。見渡せば白雪皚々たる比良の雪、今よりこの山路に掛らば、山中にて日は暮れん。疲れし足の進み難きに、坂本の邊にて宿を求めんかと、獨り旅の少年は前路を睨んで、

村井弦齋 名は寛。昭和二年歿、年六十五。

近江聖人 中江藤樹。名は原。慶安元年（一六四八）歿、年四十一。

「霏々たる雪は路を沒し、凛冽たる風は膚を裂く」

* 凛冽

滋賀の山 滋賀縣大津市附近。

* 蕭條

* 暮靄朦朧

坂本 比叡山の東麓。

暫く湖畔に立ちたりしが、良ありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば、我が故郷。今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しくこゝに留らん。夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸らば疲れも厭はじ。いで〳〵心を取直し、今宵の中にこの小山越えんものを。」と、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそは掛りけれ。痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖にすがりてたゞ一人、たどり〳〵て行く道の、岩につまづき、木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、なほも心を勵まして、風雪の中を登り行く。やがて日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、彌增す寒さは骨に徹りて、手も足も凍るばかり。一山寂寞として、耳に答ふるものとては、閉ぢし氷の下潛る、細谷川の水の音、

我が故郷　滋賀縣高島郡青柳村。

「家に歸らば疲れも厭はじ」

松の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響なんど、幽かにもの凄く聞えて、怖しとも悲しとも譬へんやうなし。かゝる難處と知りもせば、麓にて一夜を明かししものを、旅慣れぬ身の悲しさ、足に任せてこの深山路へ掛りしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。少年は進退谷りて、半ば死せる者の如く、松の根方に打倒れたり。起きも得上らず、少時降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、腹は次第に餓ゑを感じて、寒さは一入身にしみ渡り、眠るともなく死ぬともなく、前後を知らずなりにけり。

懷かしの故郷や。藤太郎は昔覺えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の疲れも打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道々

*谷り　「松の根方に打倒れたり」

「夜は漸く明けたれども」

の家は未だ多く起出でず。かの家は我が友の家なりけり、この家には我に優しき老人ありきなどと、昔の事を想ひ出でて、そゞろにあはれを催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて、復昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり、築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人なければ枝繁れり。脩竹一叢思ふまゝに根を延ばして、彼方此方に生ひ出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方を見れば、車井の軋る音さへ寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確に母人なり。少年は忽ち胸塞がりぬ。昔は許多の男女を召使ひて、勝手などに出でられし事なき母様が、この雪の朝の寒

*須臾

*脩竹

天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情なしと、湧出づる涙禁め敢へず。急ぎ車井の側に駈行きて、後よりその袂を引き「母様、私が汲みませう。」と涙ながらに取りすがる。事の不意なるに母は驚きて振返り「誰か。藤太郎、どうしてこゝへ。」藤太郎は細き聲「はい、母様の御手助を致しに參りました。まづ内にお入り遊ばせ。おつむりに雪が掛ります。」と孝子の眞情、片時も母をこの雪中に立たしめざらんとす。母は車井の綱をしつかと握りしまゝ、石の如く立てり。「叔父様とでも一緒か。」「いえ、一人で御座います。」母は聲を勵まし「叔父様が一人和郎をお出しなされたか。」「いえ、叔父様には知らせずに參りました。」母は眉を揚げ「怪しからぬ、何故そんな事を。さあお話しなさい、和郎が歸つた譯を。いえこゝで聞きませう。聞かな

「車井の綱をしつかと握りしまゝ、石の如く立てり」

叔父様　祖父吉長をさす。藤太郎は父が早く歿したから祖父吉長に養はれた。吉長は大洲侯に仕へた。藤太郎も從つて大洲に居たのである。

いうちは、めつたに家へは入れません。」颯と吹來る朝風に、地上の雪はくる〳〵と捲揚げられて、横に二人の顏を撲つ。

藤太郎は歸りし次第を物語りぬ。母は我が子の優しき心根に、そゞろ涙に咽びしが、忽ち思ひ返しけん、わざと言葉を勵まして、「和郎はこの母の言葉を忘れましたか。和郎を叔父樣に賴む時、一旦國を出たからは、あつぱれ立派な人にならないうちは、決して中途で歸るなと、あれほど堅く言聞かせた事を忘れましたか。この母が難儀を忍ぶのも、たゞ和郎を立派な者にしたいばかり。立派な者にならないで、家に居て手助をしてくれたとて、何のそれがうれしからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬことはあるまい。母は再び逢ひません。その足で大洲へお歸りなさい。」

「その足で大洲へお歸りなさい」

餘りの事に、藤太郎は默然として言葉も出でず、力拔けて雪の上に跪きぬ。母はその失望せる樣子を見て、痛はしさ胸に滿ち、かくまで我が身を思うて來りしものを、百里の道の一人旅、定めて憂き事も、つらき事も多かりしならん、せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲れを休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにして復思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば、修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを。「和郎は母の言ふ事が解りませんか。」と强くは叱れど、聲は沾みぬ。藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて、「はい、解りました。」「それなら今から歸りますか。」藤太郎は悲しき聲、「はい歸ります。」と素直に言ふ。母は素直に答へられては、なほさら腸の絞らるゝ思。遂に堪へか

大洲　愛媛縣喜多郡の町。當時加藤貞泰六萬石の城下。

「力拔けて雪の上に跪きぬ」

ねて忍び泣き、袖咬みしめて聲を呑む。藤太郎は屹として立上れり。「母様、この藥は輝の妙藥で、世にも得難き品。これ差上げたいと、わざ〳〵持つて參りました物。これだけはお取りなされて下され。」と、新谷にて得し藥を差出す。母は快く、「おゝ和郎の志、これだけは受けませう。」と、手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合はす顏、互の眼には涙一杯。母は恥づかしと、じつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、藥を手より取落してうつ向けば、雪の上にはろほろと落つる涙。雪はなほ霏々たり。母が汲み置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心を勵まして、泣く〳〵我が家を立出でたり。見送る母、見返る子、滿天の風雪、路悠々。

（近江聖人）

「藤太郎は屹として立上れり」

新谷　大洲の北、六粁にある村。

「見合はす顏、互の眼には涙一杯」

「雪はなほ霏々たり」

一九　幸福

穗積重遠

日本國は唯一無二の皇室が中心になつて、全體が大家族を成してをる國柄であります。日本は一つの大きな家であります。「國家」といひますが、日本は本當に文字通りに國にして家であり家にして國であります。今日の如く九千萬の大家族であり、天皇陛下を宗家の御主人とする大家族であることが我々の幸福であるのであります。

昭和八年の十二月二十三日皇太子殿下のお生まれになつたあの朝、サイレンが先づ一聲鳴つた、さうしてもう一聲なつた。その二聲なつた時に、私はすぐにこの歌を思ひ出したのであります。

穗積重遠　法學博士。男爵。東京帝國大學教授。明治十六年生。

「天皇陛下を宗家の御主人とする大家族」

皇太子殿下　御名明仁。繼宮と稱し奉る。

御民われ生けるしるしありあめつちのさかゆる
時にあへらく思へば

これは萬葉集にある歌であります。萬葉集には奈良朝時代の歌が多く載つてをりますが、奈良朝は實に盛んな御代であつたらしい。

あをによし寧樂の都は咲く花のにほふが如く今
さかりなり

寧樂は今は別の字を書きますが、昔は寧に樂しいといふのでかういふ字を書きました。この盛んな御代に生まれあはせた自分は何と幸福な事であるよといふのが「みたみわれ」の歌であります。私はあの朝二聲のサイレンを聞いた時にこの歌を口誦んだのであります。

御民われ　萬葉集卷六、海犬養宿彌岡麻呂の歌。

あをによし　萬葉集卷三、小野ノ老の歌。

「サイレンを聞いた時に、この歌を口誦んだ」

奈良朝はどんなに盛んであつたか知りませんがしかし今日の日本の盛んな有樣とは到底較べものにならないでせう。我が國は今や世界最大最盛の國の一つとして榮えてゐるのでありますから、奈良朝の民も幸福であつたらうけれども、昭和の御代の我々は、實に「生けるしるしありあめつちの榮ゆる時にあへらく思へば」であります。この歌は奈良朝の歌としてよりむしろ今日昭和聖代の讃歌として、尙更、意味があると思ふのであります。

しかし奈良朝時代と今日と違ふところは、奈良朝時代には他に何にも問題がなく、天下太平で、寧樂の都の八重櫻の盛りに醉ふことが出來たのでありますが、今日は中々遊んでばかりゐられる世の中ではありません。それ故我々聖代の臣民

「昭和聖代の讃歌」

は非常に幸福であると同時に、又非常に責任が重いのであります。

聖天子を戴き奉つて、この日本をどういふ方に持つて行くかといふ事が、我々の兩方の肩に掛つてをる責任であることを思ひまするとと、幸福が大きいと同時に責任が非常に重いといふ事を我々は十分に考へねばならぬのであります。

（日本の過去現在及び將來）

元朝や神代のこともおもはるゝ　守武

元日や一系の天子富士の山　鳴雪

「この日本をどういふ方に持つて行くか」

守武　姓は荒木田。伊勢の内宮の神官。連歌に長じた。天文十八年（一五四九）歿、年七十七。

鳴雪　姓は内藤、名は素行。俳人。大正十五年歿、年八十。

二〇　歌御會始

千葉胤明

明治天皇の御製を拜誦して、つねづね私どもが感激に耐へないのは、敬神・愛國・愛民の御情の溢れてをることであります。

國家有事の際に遊ばされた御一例を申しますと、

こらは皆軍のにはにいではてて翁やひとり山田もるらむ

明治三十七年、戰爭中の御製でありますが、この一首を拜しましても、陛下の民草をあはれみ給ふ大御心がうかゞはれて、たゞ〳〵感激する外はないのであります。

忘れもいたしませぬが、明治三十八年一月元日、旅順開城の公報に接した國民は、津々浦々に至るまで、戰勝を壽ぎ、萬歳を

千葉胤明　宮内省御歌所寄人。元治元年生。

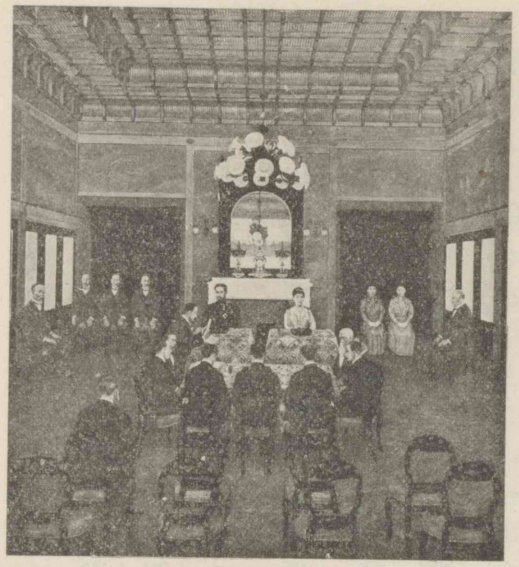
「愛民」

「民草をあはれみ給ふ大御心」

「明治三十八年一月元日」

叫んで祝杯をあげたのであります。それでその年の正月は、何となく生々潑剌の氣が、全國にみなぎつてをりました。

かうした中に、御恒例による新年歌御會始の御式が、一月十九日に行はれました。御題は「新年山」と申すのでありまして、御式場は鳳凰間でありました。私ども寄人の席は、玉座近くに設けられてありましたので、二時間の長い間、畏れ多くも龍顏を仰ぎ奉るわけでありました。



歌御會始（聖德記念繪畫館壁畫）

＊生々潑剌

「御式場は鳳凰間」

＊龍顏

参列の光榮に浴した人々は、それぞれ定めの席についてゐます。

兩陛下におかせられましては、御機嫌うるはしく出御遊ばされました。

いよ〳〵預選歌の披講となりまして、式場は寂として聲なく、水を打つたやうになつてをります。何れも入選者が何人で、その歌はどういふのであらうかと、耳を欹ててゐたのであります。

その時、講師の聲が朗かに、この靜けさを破つて響きました。

「山梨縣、陸軍歩兵二等卒妻、大須賀松枝。」

意外の入選者なので、一同ははつと胸を躍らせました。

軍國の新年歌御會始にはふさはしいやうにも思はれるし、

「式場は寂として聲なく、水を打つたやう」

さりとは又珍しいことであると、誰しもが考へたらしいのも無理のないことであります。

陛下には、御式中は常に御微動だも遊ばされないのでありますが、この一刹那御頭を少し御傾け遊ばされ、講師の讀上げる預選歌を、じつと御聽き遊ばさうとなされる御樣子でありました。

講師の聲は、靜かに續きました。

つはものに召しいだされしわが背子はいづこの
山に年迎ふらむ

人も人なり、歌も歌なり、竝みゐるもの一同ぐつと胸を打たれたのであります。

陛下には、この時極めて御感深く聞し召された御樣子に拜し奉りました。

眼前咫尺の間に龍顏を仰ぎ、陛下のこの御樣子を拜し奉つて、私どもは思はず熱い感涙のために眼をうるほしたのであります。もし御式場でなかつたならば、私は取亂して泣いたに相違ありません。

限りなく御仁慈にわたらせ給うた陛下の大御心を拜察し參らせますと、今も猶、眼底に涙の宿るを覺えるのであります。

あらたまのとしたつ山をみる人のこゝろ〴〵を
歌に知るかな

この御製は、この歌御會始の終つた後、陛下の遊ばされたのであります。この御製の蔭には、かうした一場のうるはしい物語が藏されてゐたのであります。

（明治大帝）

「御頭を少し御傾け遊ばされ」

「極めて御感深く聞し召された御樣子」

*咫尺

「私は取亂して泣いたに相違ありません」

「御製の蔭には」

二 盲坑夫

下位春吉

一九一七年三月三日の朝、南歐の空には春立つことも早く、空は底の底まで長閑に澄渡つて、鵝の毛ほどの雲の影も見えない。廣いアルドブランヂーニ邸の庭にはオレンヂの花の強い香が立罩めてゐる。

その朝、まだ外は春の夜の甘い眠りの薄絹に包まれて靜まり返つてゐる時、ベッカストリーニの室の戸をけたゝましく叩く人がある。

「ナターレ君、起きろ！　一大事が持上つたぞ！」

正しく大隊長フォリエロの聲である。手さぐりに寢臺を下りたベッカストリーニが、戸を開いて聲する方に擧手の敬禮をすると、

「今日君に勳章授與の式がある。畏い事だが、皇太后陛下が親ら君の胸に勳章をつけてやりたいとの仰せとかで、急にその式場の準備に取りかゝつた。この癈兵院の總裁も、副總裁も大慌てで出て來られて、今邸内は大騒ぎだ。何しろ足下から鳥が立つやうな話で、皆驚いてしまつたよ。君も早く支度を整へるがよい。」

大隊長の聲は晴やかである。ベッカストリーニの榮譽をわが事のやうに喜ぶ嬉しさの動悸が、その聲の裡にも響いてゐる。夢ではないか。今までうつら〳〵と見續けてゐた春の曙の夢の中に、まだこの聲を聞いてゐるのではないかしら。覺めても光明を見ず、永劫の闇に生きる外なき盲軍曹の身

下位春吉　イタリヤ、ローマ大學教授。明治十六年生。

アルドブランヂーニ邸　歐洲大戰中イタリヤ軍の失明者を收容した所。

「今日君に勳章授與の式がある」

皇太后　マルゲリータ。

「大隊長の聲は晴やかである」

＊永劫

には、この突然の悅びは夢とも現とも分ち難かつた。

「早く支度をし給へ。」

と、輕く肩を打つた大隊長の手は、彼を夢幻の天國から現實の境に移した。

「皇太子殿下もお出でになるさうだ。服裝などにも十分氣をつけ給へ。」

戸の際に、今まで默々として起立の姿勢で立つてゐた盲軍曹の頭は、次第に垂れた。やがてその足下にこぼれ落ちた涙が床を濡したかと思ふと、彼は不動の姿勢のまゝ啜り泣きに泣くのであつた。

「僕も嬉しいぞ！」

堪らなくなつて、大隊長が盲軍曹の手を握りしめた時、枯枝

皇太子　ウンベルト。

「彼は不動の姿勢のまゝ啜り泣きに泣く」

「枯枝の如く碎かれた彼の手」

の如く碎かれた彼の手に、大尉の涙がはら〳〵と散つた。

癈兵院では大混雜である。役人が走る、人夫が叫ぶ、軍人が飛ぶ、電話の鈴がひつきりなしに鳴る。大門を入る自動車の驀音、玄關を遠ざかる馬車の軋り。式場の準備は忙しく、誰も彼も右往左往に驅けまどうてゐる。寢耳に水の勳章授與式の時刻が刻々に近づく。

夜は明け放れた。まだ夢心地で、ベッカストリーニは顏も洗ひ服も着けた。始終彼の側にあつて手助けしてゐたのは從卒のピエトロ・バッチスチである。朴訥寡言な田舍者のピエトロは、正直一徹な牛のやうな男で、敏捷機智な才物ではなかつた。ベッカストリーニに服を着せておいて、一寸室の外に出たきり歸つて來ない。式場準備の大騷ぎの颶風の中に

「癈兵院では大混雜である」

＊朴訥寡言

＊敏捷機智

捲込まれて、何處かでうろ〳〵と驅廻つてゐるのであらう、何時まで待つても歸つて來ない。服を着けたばかりで、寢臺の横の椅子に腰かけてゐた盲軍曹は、氣が氣でない。門から入つて來る車馬の音を聞く毎に、彼の碎けた手はじれつたさうにぶる〳〵と顫へてゐる。

時は容赦なく進んで、式場に繰込む人の流は引きも切らない。

「ピエトロ！……ピエトロ！」

彼の聲は、從卒が出て行く時に開放つた戸口から、幾度か廊下に響き渡つた。

その時不意に廊下から澄んだ聲が答へた。

「君、誰を呼ぶのです。何の用ですか。」

「先刻から從卒を呼んでゐますけれど、……どこへ行つて了つたのだか、……僕にまだ靴を穿かせなければならないのに……。」

廊下の聲の主人はつか〳〵と室の中に入つて來た。

「僕が穿かせて上げませうか。」

「さうですか。では濟みませんが、……どうも恐れ入ります。」

ためらひながら足をさし伸べた盲軍曹の足下に跪いて、今進み寄つた少年は丁寧に靴を穿かせた。

「これ位でいゝですか……。餘り固くはありませんか。少し緩めませうか。」

「いや結構、どうも有難う……。」

ベッカストリーニがその少年にお禮を言つてゐる時、廊下

「盲軍曹の足下に跪いて、……少年は丁寧に靴を穿かせた」

の彼方から四五人の靴音が聞えて來た。

「殿下！　殿下！　何方においでで御座います。殿下！

式場の準備が出來ました……。」

と呼立てる聲に、

「こちらに居るよ。今行く。」

盲軍曹の足下から立上つて、

「さやうなら！」と輕く挨拶して

出て行くのは、實にイタリヤ王

國の皇太子殿下であつた。

さてはと氣がついて、驚いて起立した盲軍曹は、不動の姿勢で、遠ざかり行く靴音の方に擧手の敬禮をさゝげた。

見る影もない不具となつた盲目の坑夫の足下に、一國の皇

ペッカスドリーニ

太子殿下が跪いて靴の紐を結び給ふ光景を想へ。あゝ尊い詩ではないか、莊嚴な畫ではないか。

「尊い詩、莊嚴な畫」

間もなく式が始つた。大勢の役人や市民達で、さしもの廣い邸の中庭は立錐の地も餘さない。感激に打たれた盲坑夫の顏は、いつになく蒼ざめてゐる。

*立錐

「いつになく蒼ざめてゐる」

式は型の如く進んだ。すべてがたゞ一つの夢としか思はれない盲坑夫には、誰彼の演說も遠い幻の奧の人聲としか聞えなかつた。「軍功勳章銀章、陸軍工兵曹長ナターレ・ベッカストリーニ！」と誰かが呼立てた聲に驚いて起立すると、幾千の拍手が迅雷の碎けるやうに響いた。

*迅雷

「はい！」

彼はよろ〳〵と二三歩進み出た。敬禮をして立つ彼の胸

「胸に、皇太后陛下の

に、皇太后陛下の御手が觸れた。青い綬の軍功勳章の銀章が陛下の御手によつてつけられた時、二度目の迅雷が中庭から響きわたつた。

盲坑夫がやをら元の席に着かうとする時、鈴のやうな御聲が彼を呼止めた。

「あなたは目も見えず、兩手の指も碎かれた不自由の身で、絶えず新聞や雜誌に見事な作品を發表しておいでなさる。私はあなたの作品は、役人に命じて一つ殘らず集めさせて讀んでゐます。今朝院長に聞くと、あなたは右の手に殘つたその一本の指で、タイプライターを打つて、あの立派な作品

イタリヤ皇太后マルゲリータ陛下

御手が觸れた」

*やをら
「鈴のやうな御聲が彼を呼止めた」

を書出されるとか。若し差支へなければ、私の前で、何でもよいから、タイプライターを打つて見せてくれまいか。」

盲坑夫は默つて立つてゐる。顏の色はます〳〵蒼くなる。唇がふるへる。癈兵院の總裁が彼を勵ますので、やうやくに、

「畏まりました。」

と答へた彼は、從卒に命じて、平常使ひ慣れたタイプライターを持つて來させて、陛下の前の卓上に置かせた。

やはらかい春の日が彼の頸を撫でる。皇太后陛下・皇太子殿下、二人の女王殿下を始として、百官が彼の後から覗き込んでゐる。やんごとなき方々の息が身に近く感ぜられる。

今朝まだ曉の夢の覺めない頃から、身にふり掛つた重ね重ねの光榮は、唯一つの夢としか思はれない。夢に夢見る心地

「ます〳〵蒼くなる」

で、タイプライターの前に腰掛けてゐる盲坑夫の後から、

「何でもよいから……。」

と玉の御聲がかゝると、彼は忽ち電氣に打たれたやうに身震ひしたが、顏は全く蒼白く、手はとめどもなく顫へた。

右の手に殘つてゐる拇指が、タイプライターの文字の上を電の如く走つたかと見ると、紙上に打出された一行の文字は、

「聖恩の渥きに感泣す。」

とのみで、後は續けもえせず空虛なる兩眼からはら〳〵と溢れ出る熱涙を抑へんとして抑へる能はず、タイプライターの上に泣伏してしまつた。

暖かい三月の太陽は、この人生の大畫面一杯に薄紅の光を浴びせてゐた。

（大戰中のイタリヤ）

「全く蒼白く、手はとめどもなく顫へた」

「聖恩の渥きに感泣す」

「タイプライターの上に泣伏してしまつた」

「人生の大畫面一杯に」

三 茶の間

島崎藤村

子供等は古い時計のかゝつた茶の間に集つて、そこにある柱の側へ各自の背丈を比べに行つた。次郎の背の高くなつたのにも驚く。家中で一番高い。あの兒の頭はもう一寸四分ぐらゐで鴨居にまで屆きさうに見える。毎年の暮に、鄕里の方から年取りに上京して、その時だけ私達と一緒になる太郎よりも、次郎の方が背はずつと高くなつた。

茶の間の柱の側は狹い廊下づたひに、玄關や臺所への通ひ口になつてゐて、そこへ身長を計りに行くものは一人づつその柱を背にして立たせられた。そんなに背延びしては狹いと言出すものがあり、もつと頭を平にしてなどと言ふものが

島崎藤村　名は春樹。文學者。明治五年生。

あつて家中のものがみんなで大騒ぎしながら、誰が何分延びたといふしるしを鉛筆で柱の上に記しつけて置いた。誰の戯れから始つたともなく、もう幾つとなく細い線が引かれて、その一つ〳〵には頭文字だけを羅馬字であらはして置くやうな、そんないたづらもしてある。

「誰だい、この線は。」

と聞いて見ると、末子のがあり、下女のお德のがある。いつぞや遠く滿洲の果てから家をあげて歸國した親戚の女の兒の背丈までもそこに殘つてゐる。私の娘も大きくなつた。末子の背は太郎と二寸ほどしか違はない。その末子が最早九文の足袋をはいた。

私達親子のものは、遠からず今の住居を見捨てようとして

「鉛筆で柱の上に記しつけて置いた」

「頭文字だけを羅馬字であらはして置く」

「末子が最早九文の足袋をはいた」

ゐる時であつた。こんなにみんな大きくなつて、めい〳〵一部屋づつ要求するほど一人前に近い心持を抱くやうになつて見ると、何かにつけて今の住居は狹苦しかつた。私は二階の二部屋を次郎と三郎にあてがひ、末子は階下にある茶の間の片隅で我慢させ、自分は玄關側の四疊半に籠つて、そこを書齋とも應接間とも寢部屋ともして來た。今一部屋もあつたらと、私達は言暮して來た。それに、二階は明かるいやうでも西日が強く照りつけて、夏なぞは耐へがたい。南と北とを小高い石垣に塞がれた位置にある今の住居では、濕氣の多い窪地にでも住んでゐるやうで、雨でも來る日には茶の間の障子は殊に暗かつた。

「こゝの家には飽きちやつた。」

「一人前に近い心持」

と言出すのは三郎だ。

「父さん、僕と三ちやんと二人で行つて探して來るよ。好い家があつたら、父さんは見においで。」

次郎は次郎でこんな風に引受け顏に言つて、畫作の暇さへあれば一人でも借家を探しに出掛けた。

實に些細なことから、私は今の家を住み憂く思ふやうになつたのであるが、その底には何かしら自分でも動かずにゐられない心の要求に迫られてゐた。七年住んで見れば澤山だ。私達の心は既に半分今の住居を去つてゐた。

私は茶の間に集る子供等から離れて、獨りで自分の部屋を歩いて見た。僅かばかりの庭を前にした南向の障子からは、

「自分でも動かずにゐられない心の要求」

「私達の心は既に半分今の住居を去つてゐた」

「獨りで自分の部屋を歩いて見た」

家中で一番靜かな光線が射して來てゐる。東は窓だ。一枚の硝子戸越しに、隣の大屋さんの高い塀と樫の樹とがこちらを見おろすやうに立つてゐる。その窓の下には、地下室にでもゐるやうな靜かさがある。

丁度三年ばかり前に、五十日あまりも私の寢床が敷きづめに敷いてあつたのも、この四疊半の窓の下だ。思ひがけない病が五十の坂を越した頃の身に起つて來た。私はどつと床についた。その時の私は再び起つことも出來まいかと人に心配された程で、茶の間に集る子供等まで一時沈まり返つてしまつた。

どうかすると、子供等のすることは、病んでゐる私をいらいらさせた。

「家中で一番靜かな光線」

「地下室にでもゐるやうな靜かさ」

「寢床が敷きづめに敷いてあつたのも、この四疊半の窓の下だ」

「父さんを忿らせることが、父さんの身體には一番悪いんだぜ。それくらゐのことがお前達に解らないのか。」

それを私が寢ながら言つて見せると、次郎や三郎は頭をかいて、すぐ〳〵と障子のかげの方へ隱れて行つたこともある。

「子供でも大きくなつたら。」

私はそればかりを願つて來たやうなものだ。眼には見えなくても降積る雪のやうな重いものが、次第に深くこの私を埋めた。

私が地下室に嘗へて見た自分の部屋の障子へは、町の響が遠く傳はつて來た。私達の住む家は、西側の塀を境に、ある邸つゞきの抜け道に接してゐて、小高い石垣の上を通る人の聲

「言つて見せると」

「降積る雪のやうな重いものが……私を埋めた」

「町の響」

音や、いろ〳〵な物賣りの聲がそこにも起つた。何處の石垣の隅で鳴くとも知れないやうな、ほそ〴〵とした地蟲の聲も耳に入る。私は庭に向いた四疊半の縁先へ鋏を持出して、よく延び易い自分の爪を切つた。

どうかすると、私は子供と一緒になつて遊ぶやうな心も失つてしまひ、自分の狹い四疊半に隱れ、庭の草木を友として、僅かに獨りを慰めようとした。子供は到底母親だけのものか、父としての自分は偶然に子供の内を通り過ぎる旅人に過ぎないのか——そんな嘆息が、時には自分を憂鬱にした。その度に氣を取直して、また私は子供を護らうとする心に歸つて行つた。

安い思ひもなしに、移り行く世相を眺めながら、獨りでじつ

「地蟲の聲」

「獨りを慰めようとした」

「子供を護らうとする心」

＊世相

と子供を養つて來た心地はなかつた。しかし子供はそんな私に頓著してゐなかつたやうに見える。

過ぐる七年を私は嵐の中に坐りつゞけて來たやうな氣もする。私のからだにあるもので、何一つその痕跡をとゞめないものはない。髪はめつきり白くなり、坐り胼胝（だこ）は豆のやうに堅く、腰は腐つてしまひさうに重かつた。

私はもう一度、自分の手を裏返しにして、鏡でも見るやうにつくづくと見た。

「自分の掌はまだ紅い。」

と獨り思ひ直した。

ある日の午後の好い時を見て、私達は茶の間の外にある縁

「嵐の中に坐りつゞけて來たやうな」

「午後の好い時」

側に集つた。そこには私の意匠した縁臺が、縁側と同じ高さに三尺ばかりも庭の方へ造り足してあつて、蘭・山査子（さんざし）などの植木鉢を片隅の方に置けるだけのゆとりはある。石垣に近い縁側の突當りは、壁によせて末子の小さい風琴も置いてあるところで、その上には時々の用事なぞを書きつける黑板も掛けてある。そこには私達が古い籐椅子を置き、簡單な腰掛椅子を置いて、互に話を持寄つたり、庭を眺めたりして來た場處だ。毎年夏の夕方には、私達が茶の間のチャブ臺を持出して、よく簡單な食事に集つたのもそこだ。

庭にある遲咲の乙女椿の蕾も漸くふくらんで來た。それが眼につくやうになつて來た。三郎は縁臺のはなに立つて、庭の植木を眺めながら、

山査子　薔薇科、山楂子（サンザシ）科屬の落葉灌木。

「庭」

「次郎ちやん、こゝの植木はどうなるんだい。」

この弟の言葉を聞くと、それまで妹と一緒に黒板の前に立つて何かいたづら書きをしてゐた次郎が、白墨をそこに置いて三郎のゐる方へ行つた。

「そりや、引抜いて持つて行つたつて、構ふもんか――もとからこゝの庭にあつた植木でさへなければ。」

「八つ手も大きく成りやがつたなあ。」

「あれだつて父さんが植ゑたんだよ。」

「知つてるよ。山茶花だつて、薔薇だつて、さうだらう。あの乙女椿だつて、さうだらう。」

氣の早い子供等は、八つ手や山茶花を車に積んで今にも引越して行くやうな調子に話し合つた。

「今にも引越して行くやうな調子」

「そんなにお前達は無造作に考へてゐるのか。」

と私はそこにある籐椅子を引きよせて、話の仲間に入つた。

「お父さんぐらゐの年齢になつて御覽、家といふものはさう無暗に動かせるものでもないに。」

やがて自分等の移つて行く日が來るとしたら、どんな知らない人達がこの家に移り住むことか。そんなことがしきりに思はれた。庭にある山茶花でも、つゝじでも何度私が植替へて手入れをしたものか知れない。暇さへあれば箒を手にして、自分の友達のやうにそれらの木を見に行つたり、落葉を掃いたりした。

過ぐる七年の間のことは、そこの土にもこゝの石にも種々な痕跡を殘してゐた。

「家といふものはさう無暗に動かせるものでもないに」

「そこの土にもこゝの石にも種々な痕跡を殘してゐた」

いつの間にか末子は黒板の前を離れて、霜溶けのしてゐる庭へ降りて行つた。

「次郎ちやん、芍藥の芽が延びてよ。」

末子は庭にゐながら呼んだ。

「蔦の芽も出て來たわ。」

と、また石垣の近くで末子の呼ぶ聲も起つた。（嵐）

老年は私が達したいと思ふ理想境だ。今更私は若くなりたいなぞと望まない。どうかしてほんたうに年をとりたいものだと思ふ。十人の九人までは年をとらないで萎れてしまふ。その中の一人だけが僅かに眞に老年に達し得るかと思ふ。

（島崎藤村）

「蔦の芽も出て來たわ」

二三 至誠

小林一郎

昔のローマの諺に「人生は短し、技藝は久し」といふのがある。一千年のむかしに死んだ人の作品でも少しも損はれずして今に殘つて居る。吾等は其の作品を翫賞することによつて、宛ら一千年むかしの人と相語る思ひがする。吾等の心と一千年むかしの人とが其の作品を通じて相接するのである。まことに人生は短いけれども技藝の生命は久しい。併しなほ深く考へて見ると、獨り技藝ばかりでは無い、有らゆる努力の結果は皆久しき生命をもつて居るのである。

東京に住する五百萬の人は皆水道の水を飲んで居る。此の水道といふものが無ければ五百萬の人が其の生命を保つ

小林一郎　中央大學教授。明治九年生。

ローマ　イタリヤの首府。

「努力の結果は皆久しき生命をもつて居る」

「水道」

ことは出來ぬ。此の水道の起りは隨分舊いもので、天正十九年に德川氏の臣大久保藤太郎といふ人が、將軍家康の命を受けて、江戸の人の飲料水に就いて取調べたのに端を發し、承應元年に至り多摩川沿岸の住人庄右衞門・清右衞門の二人が將軍家綱の命によつて、多摩川の水を江戸へ引いて飲料水としたのが其の第一期ともいふべきである。これより幾度か改良せられ又擴張せられて今日の水道となつた。此の承應年中の水道開鑿の監督をした、江戸町奉行神尾備前守の功も亦沒せられぬものである。凡て此等の人々の名は東京の水道を始めた恩人として永遠に記念せらるべきであるが、たとへ此等の人々が如何に苦心し努力しても、實際其の水道の開鑿に當つて鋤や鍬を揮つて骨を折つた多くの人夫達の力が加

天正十九年 後陽成天皇の御代。(紀元二三五)。
德川氏 家康。德川初代の將軍。元和二年薨、年七十五。
承應元年 (紀元二三二)
多摩川 東京府南多摩郡雲取山に發し、東に流れて東京灣に注ぐ。
家綱 德川四代の將軍。延寶八年(二三四)薨、年四十。
承應 (紀元二三二—二三五)。

はらなければ、水道は完成せずして終つたに違ひない。されば今日此の水道の水によつて生命を保つて居るものは、皆此等の人夫達に對し感謝しなければならぬわけである。此等の人夫達は二百數十年のむかし死んでしまつて、其の姓名さへ全く傳はらぬ。其の子孫が今まで存して居るかどうか全く分らぬ。併し此の開鑿に打込まれた此等の人々の心の力は、此の水道の水の絶えぬ限り、東京市民の生命の中に永く活きて居るのである。吾等は此等の事實を思ひ合はせて「人生は短し、技藝は久し」といふローマの諺を改めて「人生は短し、努力の結果は久し」としなければならぬことを痛感する。

顧みれば十九世紀以來多くの記念すべき出來事があつたが、其の中で特に著しいものは科學の進歩である。多くの貴

「此等の人々の心の力」

「科學の進歩」

い學者や實際家の努力によつて、科學は此の百數十年間に目覺ましい進歩を示し、又其の研究の結果が實際に應用せられて、世界の人の生活狀態が全く一變してしまつた。飛行機や無線電信やテレヴィジョンが發達して來ると、世界の距離がすつかり短縮されたことを感ぜずには居られぬ。併し吾等は斯くの如き驚異的の進歩が、十九世紀以來遽に爲し遂げられたものと考へてはならぬ。これは十六世紀以來コペルニカス・ケプレル・ガリレオ等の人々の不屈不撓の努力の蓄積が、斯かる結果を生んだものと見なければならぬのである。眞理を追窮する研究家の熱心は、不合理なる壓迫によつて抑壓せらるべきものではなかつた。コペルニカス以下の極めて勇敢なる學者は有らゆる迫害に堪へて其の研究を續けた。

テレヴィジョン。電氣の力により此方の實景を遠隔の地に送り活動寫眞の樣にそのまゝ遠方のスクリーンに寫す裝置。

コペルニカス (1473—1543)。ポーランドの天文學者。

ケプレル (1571—1630)。ドイツの天文學者。

ガリレオ (1564—1642)。イタリヤの物理學者・天文學者・哲學者。

而して其の研究の結果が續々と發表せらるゝに隨ひ、今までは唯神祕とのみ見られて居た日月星辰の運行、風雨寒暑の變化等が一々合理的に說明せらるゝやうになり、吾等は唯洪大無邊なる神の御力を讚歎しつゝ漫然と毎日を送るのでなく、此の天地の間に存する凡ての秩序、凡ての法則を能く理解して最も安らかなる心をもつて毎日を送ることが出來るやうになつた。これが近世科學の淵源とも稱すべきものである。實に此等の研究家の勇氣は、決死の覺悟をもつて敵陣に向つて突進する勇士に比して、優るとも決して劣らぬものである。此等の學者の研究によつて宇宙の洪大にして微妙なる組織が次第に明かになつたが、それ等の研究の結果を聞いた人達は、はじめ甚だしく寂しい感じに襲はれた。洪大無邊なる宇

「漫然と毎日を送る」

＊洪大無邊

宙の中に於て吾等の占めて居る所の地域は、殆ど比べものにならぬほど狹いものである。悠久なる宇宙の生命に比べて見ると、吾等の五十年や六十年の生涯はまことにいふに足らぬものである。吾等が此の豆の如く小さい地球の上に於て如何に大きな事業を完成して見たところが、宇宙の大に比べては全く無意味のものに過ぎぬ。併しながら更に考へ直して見ると、吾等は少しも自ら小にし自ら賤しむには及ばぬのである。此の宇宙の洪大なる組織、此の悠久なる生命を知つたのは、吾等自身の力ではないか。吾等自身に具はれる心の力によつて、凡て此等の事を明かにし得たのではないか。吾等は五尺か六尺の小さい身體をもつて、狹い地上に吾等の一生を托し、僅かに百年に足らぬ壽命をもつて居るのみである。

「此の悠久なる……吾等自身の力」

さりながら吾等は坐して此の宇宙の隅から隅までの祕密を知ることが出來るのである。又數千萬年のむかしの事を知り、數千萬年の後の事をも豫想し得らるゝのである。

ライプニツは人を稱して「小宇宙」といひ、孟子は「萬物皆我に備はれり」といつたが、まことに其の通りである。吾等の心の力はまことに偉大なるものである。是は此の宇宙の大生命と、吾等の生命とが相通つて居るからであると考へなければなるまい。吾等は宇宙と共に生きて居るのである。それは太平洋に打つ涙の一つ〳〵が皆太平洋全體の水と通ひあつて居るのと同じことである。斯ういふことが彼の貴い研究家によつて教へられたのである。

中庸の中に至誠の貴いことを說いて、

ライプニツ（1646—1716）ドイツの哲學者。

孟子 名は軻。支那の哲學者。（西紀前三七二—二八九）。

「吾等は宇宙と共に生きて居るのである」

中庸 四書の一。もとは禮記中の篇名。

唯天下の至誠は能く其の性を盡くすことを爲す。能く其の性を盡くせば則ち能く人の性を盡くす。能く人の性を盡くせば則ち能く物の性を盡くす。能く物の性を盡くせば則ち以て天地の化育を贊く可し。以て天地の化育を贊く可ければ則ち以て天地と參す可し。

とあるが、盡くすとは則ち能く究め能く知り、又其の知る所を能く應用することである。今日吾等が此の文化的生活をして多くの便益を得て居るのは、十六世紀以來の多くの學者研究家の至誠の賜といふべきである。獨り學者研究家のみならず、其の研究の結果を實生活に應用することに力を用ひたる有名の人、無名の人の、至誠の賜として、感謝しなければならない。

（實業之日本）

＊化育
＊贊く

「至誠の賜として、感謝しなければならない」

大楠公（横山大觀筆）

二四　櫻井驛

松居松翁

（攝津國櫻井驛の城主櫻井兵衞尉康光が庭前。中央、古松一株、下手は一面の庭樹を植込み、其の後に母屋の見ゆる心。上手も木振面白き庭樹、夏草の花壇などあり。處々に菊水の紋打ちし幕を張る。正面は天王山を近く望み、寶積寺の三重の塔は、その山腹に塔頂を露はす。遠く淀川船の船歌聞ゆ。正成は正忠・正遠及び櫻井康光夫妻と共に出で來る。正成・正忠・正遠の三人は武裝す。）

正成（正忠に）仲やお久がまゐつたら、直ちに發足致しませう。一同に支度をさせていたゞきたい。

正忠　承知致しました。

（向うより武士一人かけ來る）

武士　奥方と和子樣とが御出でになりました。

松居松翁　名は眞玄。劇作家。昭和八年歿、年六十四。

時　延元元年（一九三六）五月。

處　攝津國櫻井驛。

人　楠木判官正成。四十三歳。庄五郎正行。十二歳。備前守正忠（一族）。惠美太郎正遠（同）。櫻井兵衞康光。四十餘歳。お久の方（正成の妻）。水無瀬（康光の妻）。

天王山　京都府乙訓郡大山崎村にある小山。

寶積寺　天王山腹にある眞言宗の寺。

＊和子

正成　おゝ、これへ案内してくれ。

武士　はつ。（向うへ去る）

（向うよりお久の方と庄五郎とが武士に伴なはれて出づ。侍女二人つき添ふ。武士たちは鎧櫃を舁ぎて出づ）

庄五郎（正成にすがりつきて）父上、とう〳〵参りました。

正成（庄五郎の頭を撫でつゝ）うむ、よう來たな。（櫻井夫妻に）この様な遠慮のない奴でございます。（庄五郎とお久の方に）櫻井どの御夫婦ぢや。今度は大勢が厚い御世話に預つた。

（お久の方と庄五郎とは夫妻に挨拶する）

お久　それは忝い事でございます。荒くれ者ばかりで、さぞ御迷惑でござりましたらう。

康光　何の手前どもこそ。都にては判官殿に何かと御世話

判官　檢非違使の尉。元弘三年（一九二三）正成檢非違使尉となる。

に預つて居ります。

水無　何にしても、こゝは庭先、どうぞあれへお通り下さりませ。

正成　いや、兩人には申し聞けたいことがございます。暫くこゝを拜借しませう。（武士に）供のものは、御臺所でもお借り申して休息させるがよい。

水無　いえ、わたくしが御案内申し上げます。

お久　それでは却つて恐れ入ります。

水無　（供の者に）さあ、かうお出でなさりませ。（康光夫妻を先に召仕たち下手に入る。武士は一禮して向うへ去る。行々子鳴く）

お久　此の度はわざ〳〵お迎をいたゞきまして、有難う存じました。

＊申し聞けたい

「行々子鳴く」

正成　うむ、わしも急に逢ひたくなつたのでな。齡のせゐかの、今度は不思議に庄五郎の顔が見たくなつてな。

庄五　父上、私も初陣が出來るのでございますか。

正成　（笑つて）　それで鎧櫃をもつて來たのか。

庄五　はい。

正成　（なほ笑つて）お前はまだ早いよ。

庄五　併しその中に戰の無い時が參りは致しませんか。

正成　（苦笑して）　さうなれば結構ぢやが、お前一代、いや何代も戰をせねばならぬ事になるであらう。（思はずお久の方と顏を見合はす。お久の方黯然となる）

庄五　それでも今度は父上と一緒に戰がしてみたいなあ。

正成　さういふ時節が來るかも知れぬ。併し今度はもう一

「黯然となる」

度留守居せえ。

庄五　でも、私はもう十二歳になつて居ります。

正成　併しまだ戰のしやうは知らないからな。

庄五　いゝえ存じて居ります。父上が戰場へ出られた御留守の間でも、私は將監や母上から兵法の講釋を伺つて居りました。孫子・吳子も、六韜・三略も、昔讀んでしまひました。

正成　それは偉いなあ。父は此の春以來一緒に暮して居りながら、それほどとは知らなかつた。お久、お前にさへまかせて置いたら、二郎も小二郎も、その他の伜たちも、庄五郎の弟たるに恥ぢないものに仕立ててくれるであらう。そしてわしの志を襲ぎ得るものが既に五人もあるとすれば、正成は心を安く、いつでもこの世を去れるわけだ。

將監　こゝにては左近衞將監植木正家。
孫子　支那古代の兵法家。名は武。「孫子」十三篇を著はす。
吳子　支那古代の兵法家。名は起。「吳子」一卷を著はす。
六韜　支那古代の兵書。
三略　支那古代の兵書。
二郎　正成の第二子。後に正時。
小二郎　正成の第三子。後に正儀。
五人　正成の第四子正秀、第五子正平を併せていふ。「いつでもこの世を去れるわけだ」

庄五　（父の顔をじつと見て）　では、父上はもう死を決しておいでになるのでございますか。

正成　（やゝ聲を勵まして）　その尋ねかたは愚か過ぎるぞ。苟も武士の家に生まれたものは、如何なる時、如何なる場合でも、討死の覺悟なくして戰場に臨むべきではない。わしは赤阪や千劍破に城を築いた時でも、この春の洛中の戰でも、きつと討死の覺悟は定めて居た。それで居て、今日まで無事に戰場をかけめぐつて居た。そこが吳子の所謂「死を必する時は則ち生きる。」ぢや。死生を超越してこそ初めて眞の武士といふ事が出來るのぢや。

お久　それに致しましても、なぜ今度に限り、わざ〳〵私どもをお呼寄せになつたのでございませう。心得のため伺つ

「愚か過ぎるぞ」

赤阪　大阪府南河内郡赤阪村字水分。

千劍破　大阪府南河内郡と奈良縣南葛城郡との境にある金剛山の西麓。南河内郡千早村に城趾がある。

この春　延元元年（一九六）二月、正成京都に尊氏を破る。

死を必する　吳子に「凡ソ兵戰ノ場ハ屍ヲ止ムルノ地ナリ。死ヲ必スルトキハ則チ生キ、生ヲ幸スルトキハ則チ死ス。」

「死生を超越してこそ初めて……」

て置きたいと存じますが。

正成　（笑つて）　今もいふ通り、これは齡のせゐらしいぞ。實は今度の戰は、正成の出つくはした何十度の合戰中で、一番難儀なものらしい。そこでわしはひどく迷つたものだ。ゆうべも眞夜中に目が冴えて眠られぬまゝ、吳子を讀んだ。そして、あらゆる疑が解けた。「兵を用ふるの害は、猶豫最も大なり　三軍の災は狐疑に生ず。」ぢや。正成の兵法、今日までは、如何なる時も狐疑せず、敵をして疾風迅雷耳を掩ふの遑なからしめるにあつたが、今度ばかりは狐疑し猶豫した。その爲に庄五郎の身も餘計に案ぜられて、お前たちを呼寄せる事になつたのぢや。今になつて見れば、杞人が天を憂ひたるやうな愚かさで、正成、心ひそかに恥ぢて居るの

兵を用ふる　吳子に「故ニ曰ク、兵ヲ用フルノ害ハ猶豫最モ大ナリ。三軍ノ災ハ狐疑ニ生ズ。」

「今度ばかりは狐疑し猶豫した」

杞人　列子に「杞國ニ人ノ天崩墜シテ身ノ寄スル所無キヲ憂ヘ、寢食ヲ廢スル者有リ。」

ぢや。併しわしも今年は四十三ぢや。今までの戰場で無事であつただけ、これからは段々危險が大きくなつて行く譯ぢや。親子三人が手を取合つて長閑に語り合ふ折も、この次にはもう無いかも知れぬ。さうして見れば、お前たちにわざ〳〵來て貰つた事も無益ではなかつたらしい。いや、庄五郎の學問識見のほどを知つただけでも、わしの心の曇は去つて、狐疑もなく、猶豫もなく、天空海濶の心をもつて兵戰の場に赴く事が出來る。これも云はばお前たちの賜物だ。正成禮をいふ。

お久　そのお喜びを伺つて、私どもも、どのやうに嬉しいか分りません。今度は今度はと、どの合戰の時でも、お身の上を危みながらお見立て申して居りましたが、今度ばかりは安心して御見送り申す事が出來ます」

「天空海濶の心をもつて兵戰の場に赴く事が出來る」

「今度ばかりは安心して御見送り申す事が出來ます」

心して御見送り申す事が出來ます。有難うござりまする。若し神佛の思召に適ひます事ならば、出來ますだけは御身命をお厭ひ遊ばして……。（思はず涙ぐむ）

正成　よくいうてくれた。わしも益もなく生命を棄てようとは思はぬ。生きてさへ居れば、まだお上に御奉公の出來る身ぢや。併し今度の戰は、九死に一生を求めるのぢや。萬に一つの手違ひがあつても討死をせねばなるまい。お前の兄上、わしの弟たちも、枕を並べて討死をせねばなるまい。が、喜んでくれ。あの人たちは、喜んでわしと一緒に死ぬ覺悟をもつて居てくれるのぢや。この正成は生まれ落ちて、一つ自得した事とてもないが、ただ士卒と共に樂しみもし、苦しみもする事を知つて居る。そしてそれはこの三

「神佛の思召に適ひます事ならば……」

「よくいうてくれた」

お上　後醍醐天皇。

兄上　備前守正忠。

略の卷から教へられたのぢや。庄五郎、お前も熟讀玩味して、出來る事なら、徒らに弓槍を取つて護國の楯となるばかりでなく、治國平天下の輔佐の臣ともなるやうに心掛けるがよい。（腰の小刀をぬいて）これは先年、お上が隱岐の島より還御の砌、『此の度のことは、正成そち一人の力であつたぞ。』といふ忝い綸言と共に下し賜はつた尻懸則長ぢや。どうか楠木家の續く限、子孫のものに語り續けて、世にも稀なる朝恩を永久に傳へてくれ。それからこの一卷は、今も云つた通り、この正成が一生の心の糧ともなり、數十箇度の合戰の指南車ともなつてくれた貴重な書ぢや。幸ひにお前の代になつて、この中の語が王佐の事業の資ともならば、正成あの世から禮を云ふぞ。お久にはこの上いふべきこ

「治國平天下の輔佐の臣ともなるやう」

先年　元弘三年（一九二三）。

尻懸則長　大和尻懸の刀鍛冶。略〻同時代の人。こゝにてはその人の鍛へし刀の意。

「お久にはこの上いふべきこともないが」

ともないが、たゞ心を用ふべきは足利殿ぢや。正成一代にあの人ほど獪い人を見た事はない。如何なる手だてをもつて近づいて來ようとも、決してその人の甘言に耳をかすな。お前ほど堅固な心のものに、いらぬ用心をさせるやうではあるが、子故の闇に迷ひ易いが親の情ぢや。君子も道を以てすれば欺かれぬものでもない。戒めても戒むべきは足利殿ぢやぞ。

お久　御教訓一々に肝に鏤りつけて、きつと御言葉の通りに致します。御安心を願ひます。

正成　それを聞いてわしも心が落着いた。

（この時上手に陣鐘・太鼓の音聞ゆ）

（楠　正成）

子故の闇　「人の親の心は闇にあらねども子を思ふみちにまどひぬるかな」（藤原兼輔）

「わしも心が落着いた」

二五 國史に還れ

徳富蘇峯

國史に還れ。日本國の歴史は大和民族の系圖である、我等が祖先の功科表である、日本帝國の寶庫である、日本國民の經典である。日本國を知るには、歴史を通して知るより他に方法はない。國史は實に忠實なる案内者である、信頼すべき指導者である。

我等は歴史的に考慮せねばならぬ。すべての人類は、平等觀よりすれば皆同胞である。されど歴史觀よりすれば、すべての國は皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同一でなく、乙國と丙國とも亦等しからず、丙國と甲國とも勿論同じでない。十箇國あれば十箇國だけの相違があり、百箇國あ

徳富蘇峯 名は猪一郎。貴族院議員。文久三年生。

「國史に還れ」

「信頼すべき指導者」

「歴史的に考慮せねばならぬ」

* 平等觀

* 歴史觀

れば百箇國だけの差異がある。此の特殊の國性を維持するを得て、始めて獨立國の意義が完うせられる。獨立國の本義は、形式的に他の干渉を絶ち、我が自主の體面を保つのみではない。精神的に自主であらねばならぬ。詳に言へば、精神的に自國の國性を把持し、保存し、開展させ、發達させねばならぬ。

我が大和民族の誇は、日本の歴史である。此の歴史の中の事實は、必ずしも悉く敬すべく、仰ぐべき事のみではない。人間は神ではない。人間の所作には、樣々の過失もあれば罪惡もある。しかし總括して言へば、日本の歴史は大和民族の恥辱史ではなくて光榮史である。

日本の皇室が如何に世界に比類のないありがたい皇室であるか、日本の國民が、一旦緩急に際しては、如何に猛烈且勇敢

* 把持

「大和民族の誇」

* 緩急

に護國の精神を發揮したか、又大和民族の中に、世界的偉人と稱するに足る者を如何に輩出せしめてゐるかは、歴史の語る所である。恐れ多いことながら、我が明治天皇の盛德大業も、國史の背景によつて始めて明白に、精詳に、剴切に、これを會得することが出來る。彼の五箇條の御誓文の如き、又彼の帝國憲法の如き、國史の背景なくしては、たゞ雄快なる一種の文書たり、乾燥無味なる一部の法文たるに止まるであらう。

凡そ固陋頑冥の戀舊思想や、保守退嬰の島國根性や、詭激狂妄の赤化主義や、架空浮誇の摸倣精神等は、何れも我が國史を閑却した爲に生じたものである。現狀を株守するも國史を知らぬが爲、現狀に不安を抱くも國史を知らぬが爲、國民的自信力を失墜するも國史を知らぬが爲、自惚根性に囚れて醉生夢死するも國史を知らぬが爲に外ならぬ。

「國史の背景によつて始めて明白に、……會得することが出來る」

五箇條の御誓文　明治元年三月、明治天皇は新政の方針五箇條を述べられた。

帝國憲法　明治二十二年二月十一日宣布さる。七章七十六箇條から成る。

＊戀舊思想

＊保守退嬰

＊詭激狂妄

＊赤化主義

「國史を閑却した爲に生じたもの」

＊自惚根性

國史に還れとは、すべての國民に歴史家となれといふ意ではない。それには專門の學者がある。たゞ日本國民として日本歴史の、其の大なる筋道を諒解せよといふのである。日本國民は豐富なる歴史を持つてゐる。此の歴史こそ「日本」の潛在せる寶藏である。苟も國民的に生活し、活動しようとする者は、先づ此の寶藏に總べてを求めなくてはならぬ。

（國民小訓）

＊醉生夢死

「日本國民として、日本歴史の、其の大なる筋道を諒解せよ」

〔終〕

字音假名遣一覽

（本表は記憶の便宜上少數の漢字音假名遣を擧げ、他は之を類推せしむる。漢音・呉音は別に區別せず、但し兩音に關係せる必要語は各別に掲出した。類形の漢字は記憶の必要上同列に之を掲げ、一覽に便した。）

イ

ゐ
尉慰・韋偉緯煒違圍葦閨
幃・唯維帷惟・委倭餧痿逶
萎・胃渭謂蝟・爲位・威・畏・彙・
遺

ゐき
域閾

ゐん
員韻隕殞・尹・允・院・筠

此ノ外ハ大抵いノ假名。

エ

ゑ
會繪・囘・廻・畫・穢・惠・慧・衞・

ゑい
衞

ゑつ
越鉞・粤・曰

ゑん
袁猿遠轅園・怨宛苑婉鴛
蜿・爰媛援猨瑗・垣・圓・寃

此ノ外ハ大抵えノ假名。

え
徭搖謠遙瑤鷂・要腰・曜・燿
耀・夭妖殀・幼拗窈・杳

えふ
葉

よう
用俑涌・蛹・踊・容・蓉溶熔鎔・
庸佛・牖・膺鷹・擁甕・癰孕・蠅

此ノ外ハ大抵やうノ假名。

オ

を
烏嗚塢・惡・汚

をく
屋

をつ
越・膃

をん
溫慍・薀・袁園遠・怨宛苑・寃・穩

此ノ外ハ大抵おノ假名。

あふ
押狎・鴨・凹

おう
應鷹・嘔・毆・歐・嫗・謳・鷗・甌・翁

わう
蓊甕
王往枉汪旺・尨皇・鳳・黃・横

此ノ外ハ大抵あうノ假名。

カ

くわ
化花貨訛靴・禾和科・果菓
課夥・裹・顆・窠・華・嘩・譁・禍・蝸

コ

かふ
恰洽閤・甲匣狎胛岬・盍・溘
嗑・闔

がふ
合

こう
孔吼・亙・恆・口扣叩・后・垢・逅
訴・苟・拘・鉤・溝・構・搆・購・媾・篝
溝・工・紅・虹・訌・功・攻・貢・槓・鴻・
倥・控・侯・候・喉・猴・洪・哄・鬨・後・
弘・寇・厚・公・興・薨・肱・肯・恒

ごふ
劫・業

くわう
光・恍・晃・胱・觥・皇・惶・徨・煌・篁
蝗・遑・黃・廣・曠・礦・鑛・壙・黌・荒

ぐわう
慌・宏・紘
轟

（ゴ）

此ノ外ハ大抵かう（がう）ノ假名。

サ

さふ
揖・輯・緝・葺・習・摺・集・拾・襲・執・
澁・濕

さう
十・什・汁

さゆう
終・衆・宗

さゆう（しゆう）
從・縱・蹤・充・銃・戎・絨

じゆう（じゆう）
從・縱・蹤・聳・慂・竦・誦・
（しゆう）ト書クモ妨ナシ）

ぢゆう
重・住・頭（ぢゆうハぢうト
書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵しう（じう）ノ假名。

せう
小・少・抄・鈔・肖・梢・宵・霄・消・稍
硝・逍・銷・誚・哨・蛸・召・昭・照・詔
韶・沼・招・紹・蕭・簫・嘯・瀟・焦・蕉
憔・樵・礁・笑・燒・椒
繞・饒・遶・擾
捷・睫・妾・接・渉・慴・慴
松・訟・頌・鬆・鐘・衝・踵・腫・腫・升
昇・陞・從・慫・縱・蹤・聳・慂・竦・誦・
證・稱・勝・承
丞・蒸・拯・乘・剩・冗・繩・茸
丈・仗・杖・孃・釀・定・錠・場・娘

シ

しふ
溼・濕

じふ
十・什・汁

しゆう
終・衆・宗

じゆう
從・縱・蹤・充・銃・戎・絨

（しゆう）
（しゆう）ト書クモ妨ナシ）

ぢゆう
重・住・頭（ぢゆうハぢうト
書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵しう（じう）ノ假名。

せう
小・少・抄・鈔・肖・梢・宵・霄・消・稍
硝・逍・銷・誚・哨・蛸・召・昭・照・詔
韶・沼・招・紹・蕭・簫・嘯・瀟・焦・蕉
憔・樵・礁・笑・燒・椒
繞・饒・遶・擾
捷・睫・妾・接・渉・慴・慴
松・訟・頌・鬆・鐘・衝・踵・腫・腫・升
昇・陞・從・慫・縱・蹤・聳・慂・竦・誦・
證・稱・勝・承
丞・蒸・拯・乘・剩・冗・繩・茸
丈・仗・杖・孃・釀・定・錠・場・娘

ぜう
溺・嫋・條・尿

タ

たふ
答・塔・搭・沓・踏・納・衲・榻

とう
東・棟・凍・豆・逗・頭・鬪・痘・登・燈
鐙・磴・剳・多・疼・鞳・藤・籐・謄・騰・
等・投・偸・透・桶・統
童・僮・撞・瞳・艟・同・洞・桐・胴・銅
筒・動・慟

どう

此ノ外ハ大抵たう（だう）ノ假名。

（ド）

ナ

なふ
納・衲

のう
農・濃・儂・膿・能

此ノ外ハ大抵なうノ假名。

ニ

にふ
入

にゆう
乳（にゆうハにうト書ク
モ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵にうノ假名。

ねう
饒・撓・遶・尿・溺

によう
女

ねふ
捻

此ノ外ハ大抵にやうノ假名。

ヒ

へう
表・俵・票・標・漂・嫖・飄・飄・剽・猋
飈・豹・莩

べう
苗・描・猫・錨・秒・眇・渺・廟

ひよう
馮・憑・冰

此ノ外ハ大抵ひやう（びやう）ノ假名。

（ビ）

ホ

はふ
法・乏（漢音）

ほふ
法・乏（呉音）

ばふ
乏（漢音）

ぼふ
法・乏（呉音）

ほう
奉・俸・捧・丰・蜂・峯・逢・烽・蜂・鋒
縫・蓬・朋・崩・鵬・繃・封・幇・豐・鳳

ぼう
矛・亥・某・謀・貿・眸・棒

此ノ外ハ大抵ほう（ぼう）ノ假名。

（ボ）

（終）

字音假名遣一覽

（本表は記憶の便宜上少數の漢字音假名遣を擧げ、他は之を類推せしむる。漢音・吳音は別に區別せず、但し兩音に關係せる必要語は各別に揭出した。類形の漢字は記憶の必要上同列に之を揭げ、一覽に便した。）

イ

ゐ
尉慰韋偉緯煒違圍葦閨
幃唯維帷惟委倭餧痿逶
萎胃渭謂蝟爲位威畏彙
遺

ゐき
域閾

ゐん
員韻隕殞尹允院筠

此ノ外ハ大抵いノ假名。

エ

ゑ
會繪回廻畫穢惠慧衞

ゑい
衞

ゑつ
越鉞粤曰

ゑん
袁猿遠轅閼怨宛苑婉鴛
蜿爰媛援猨瑗垣圓寃

此ノ外ハ大抵えノ假名。

え
徭搖謠遙瑤鷂要腰曜燿
耀夭妖殀幼拗窈杳

えふ
葉

よう
用俑涌蛹踊容蓉溶熔鎔
庸佛牖膺鷹擁甕癰孕蠅

此ノ外ハ大抵やうノ假名。

オ

を
烏嗚塢惡汚

をく
屋

をつ
越鰯

をん
溫慍蘊袁園遠怨苑寃穩

此ノ外ハ大抵おノ假名。

あふ
押狎鴨凹

おう
應鷹嘔毆歐嫗謳鷗甌翁

わう
蓊甕
王往枉汪旺尪皇凰黃横

此ノ外ハ大抵あうノ假名。

カ（ガ）

くわ
化花貨訛靴禾和科果菓
課夥裹顆窠華嘩譁禍蝸

ぐわ
過渦卦火戈瓜寡

くわい
瓦臥畫
會繪檜膾獪鱠回徊蛔廻
傀槐魁瑰塊嵬悔晦誨灰
恢詼懷壞快怪潰乖
外
畫劃郭廓獲穫蠖鑊擴
霍藿擴馘
活刮括闊聒滑猾豁
月
串患綴淺完莞筦貫慣官
宦管菅棺逭館暖換煥渙
環還寰圜鐶勸灌歡觀鸛
讙懽驩鑵澣寬桓款冠卷
盥關鰥
丸紈元玩頑顧

ぐわん

此ノ外ハ大抵か（が）ノ假名。

キ

きふ
及吸汲級笈岌給翕泣急

きゆう
弓窮躬窮宮（きゆうハきうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵きうノ假名。

ケ（ゲ）

けう
喬僑橋嬌矯驕徼竅梟敎
叫

げう
堯僥澆曉曉翹

けふ
夾俠挾狹峽頰鋏篋愜莢
怯劫協脇脅

げふ
業鄴

きよう
共供拱恭龔恐蛩跫聲凶
兇匈恟胸興矜兢

ぎよう
凝

此ノ外ハ大抵きやう（ぎやう）ノ假名。

コ（ゴ）

かふ
恰洽閤甲匣狎胛岬盍溘
嗑闔
合

がふ
孔吼亙恆口扣叩后垢逅
詬苟拘鉤溝構搆購篝
溝工紅虹訌功攻貢槓鴻
倥控侯候喉猴洪哄閧後
弘寇厚公與薨肱肓恒
劫業
光恍晃胱觥皇惶徨煌篁
蝗遑貢廣曠礦鑛壙黌荒
慌宏紘
轟

此ノ外ハ大抵かう（がう）ノ假名。

ごふ
楫輯緝葺習摺集拾襲執
澁濕

くわう
十什汁
終彙宗
從縱蹤充銃戎絞
（しゆう（じゆう）ハ（しう・じう）ト書クモ妨ナシ）

ぐわう
重住頭（ちゆうハぢうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵しう（じう）ノ假名。

シ（ジ）

しふ
小少抄鈔肖梢宵霄消稍
硝逍銷誚哨蛸召昭照詔
韶沼招紹蕭簫嘯瀟焦蕉
憔樵礁笑燒椒

じふ
繞饒遶擾

しゆう
捷睫妾接渉懾慴

じゆう
松訟頌鬆鐘衝踵腫腫升
昇陞從慫縱蹤聳悚竦誦
證稱勝承
丞蒸拯乘剩冗繩茸
丈仗杖孃釀定錠場娘
溺嫋條尿
帖疊

ぜう
憔

せふ
捷

しよう
松

じよう
丞

ぢやう
丈

てう
帖

でふ
溺

此ノ外ハ大抵しやう（じやう）ノ假名。

ぢ
持痔峙治地尼怩除

ぢき
直

ぢく
軸舳竺蚓忸

ぢつ
昵

ぢよ
女除

ぢん
陣塵

此ノ外ハ大抵じノ假名。

ぜ
豆逗頭圖途徒

此ノ外ハ大抵ずノ假名。

ソ（ゾ）

さふ
挿匝

ざふ
雜

そう
窗總聰惣葱偬宗綜踪淙
崇曾僧增層憎贈奏湊輳
叟搜艘瘦嗽漱嗾簇宋疎
叢藪送

此ノ外ハ大抵さう（ざう）ノ假名。

タ（ド）

たふ
答塔搭沓踏納衲榻
東棟凍豆逗頭鬪痘登燈
鐙磴劄冬疼嚢藤籐謄騰
等投偸透桶統
童僮撞瞳艟同洞桐胴銅
筒動慟

どう

此ノ外ハ大抵たう（だう）ノ假名。

ニ

にふ
入

にゆう
乳（にゆうハにうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵にうノ假名。

ねう
饒撓遶尿溺

によう
女

ねふ
捻

此ノ外ハ大抵にやうノ假名。

ノ

なふ
納衲

のう
農濃儂膿能

此ノ外ハ大抵なうノ假名。

ヒ（ビ）

へう
表俵票標漂嫖飄飄剽猋
飈豹莩

べう
苗描猫錨秒眇渺廟

ひよう
馮憑冰

此ノ外ハ大抵ひやう（びやう）ノ假名。

ホ（ボ）

はふ
法・乏（漢音）

ほふ
法・乏（吳音）

ばふ
乏（漢音）

ぼふ
法・乏（吳音）

ほう
奉俸捧・手蚌・峯逢烽蜂鋒
縫蓬・朋崩鵬繃・封幇・豐鳳
矛・家・某謀・實・眸・棒

ぼう

此ノ外ハ大抵はう（ぼう）ノ假名。

メ

めう
苗猫妙

此ノ外ハ大抵みやうノ假名。

モ

もう
蒙朦濛艨

此ノ外ハ大抵まうノ假名。

ユ

いふ
邑・悒・揖

ゆう
雄・勇・熊・裕・融

此ノ外ハ大抵いうノ假名。

リ

りふ
立笠粒

りゆう
龍・隆（りゆうハりうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵りうノ假名。

れう
寮療遼燎僚瞭・了・料・聊・寥

れふ
獵鬣

りよう
凌菱稜陵綾・瞭

此ノ外ハ大抵りやうノ假名。

レ

ロ

らふ
蝦・朧・蘭

ろう
籠瀧朧瓏聾・隴・櫓・樓・僂・螻
鏤・弄・陋・漏

此ノ外ハ大抵らうノ假名。

チ

ちふ
蟄

ちゆう
中仲冲忠衷・注柱註・駐・誅
蛛・廚・躇（ちゆうハちうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵ちうノ假名。

てふ
蝶喋牒諜渫帖貼

てう
朝潮嘲・兆銚挑眺跳窕・鳥・
凋・調彫鯛・超迢貂髫弔・鳥・

ちよう
釣・肇・糶・趙
冢塚・徵懲・重・澄・寵

此ノ外ハ大抵ちやうノ假名。

ツ

つ
此ノ外ハ大抵すノ假名。

ヅ

テ

てふ
蝶喋牒諜渫帖貼

てう
朝潮嘲・兆銚挑眺跳窕・鳥・
凋・調彫鯛・超迢貂髫弔・鳥・

てう
釣・肇・糶・趙

此ノ外ハ大抵てうノ假名。

ト

とう
答塔搭沓踏納衲榻
東棟凍豆逗頭鬪痘登燈
鐙磴劄冬疼嚢藤籐謄騰
等投偸透桶統
童僮撞瞳艟同洞桐胴銅
筒動慟

どう

此ノ外ハ大抵たう（だう）ノ假名。

ナ

ヌ

ネ

ねう
饒撓遶尿溺

によう
女

ねふ
捻

此ノ外ハ大抵にやうノ假名。

ノ

なふ
納衲

のう
農濃儂膿能

此ノ外ハ大抵なうノ假名。

ヒ（ビ）

へう
表俵票標漂嫖飄飄剽猋
飈豹莩

べう
苗描猫錨秒眇渺廟

ひよう
馮憑冰

此ノ外ハ大抵ひやう（びやう）ノ假名。

フ

ヘ

ホ（ボ）

はふ
法・乏（漢音）

ほふ
法・乏（吳音）

ばふ
乏（漢音）

ぼふ
法・乏（吳音）

ほう
奉俸捧・手蚌・峯逢烽蜂鋒
縫蓬・朋崩鵬繃・封幇・豐鳳
矛・家・某謀・實・眸・棒

ぼう

此ノ外ハ大抵はう（ぼう）ノ假名。

マ

ミ

ム

メ

めう
苗猫妙

此ノ外ハ大抵みやうノ假名。

モ

もう
蒙朦濛艨

此ノ外ハ大抵まうノ假名。

ヤ

ユ

いふ
邑・悒・揖

ゆう
雄・勇・熊・裕・融

此ノ外ハ大抵いうノ假名。

ヨ

ラ

リ

りふ
立笠粒

りゆう
龍・隆（りゆうハりうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵りうノ假名。

れう
寮療遼燎僚瞭・了・料・聊・寥

れふ
獵鬣

りよう
凌菱稜陵綾・瞭

此ノ外ハ大抵りやうノ假名。

レ

ロ

らふ
蝦・朧・蘭

ろう
籠瀧朧瓏聾・隴・櫓・樓・僂・螻
鏤・弄・陋・漏

此ノ外ハ大抵らうノ假名。

ワ

ヰ

ウ

ヱ

ヲ

ン

牛

す・つ・ゆ・る等ノう列ノ音ノ下ニ來ル**い**ノ發音ハ**ゐ**ノ假名デアル
水（すゐ）追（つゐ）隨（ずゐ）唯（ゆゐ）
類（るゐ）等
此ノ外ハ**い**ノ假名
愛（あい）英（えい）明（めい）淸（せい）
等

昭和十二年七月二十日　印刷
昭和十二年七月二十三日　發行
昭和十三年一月二十二日　訂正再版印刷
昭和十三年一月二十五日　訂正再版發行

女子國文新編（四年制）全八册奥附
自卷一　至卷八　定價　各　金五拾八錢

著作者　垣内松三
東京市神田區美土代町十八番地
發行兼印刷者　株式會社　文學社
代表者　小林竹雄
印刷所　東京市本郷區真砂町三十六番地　日東印刷株式會社

不許複製

發兌
東京市神田區美土代町十八番地
電話神田三五一番
振替口座東京三八七八番
株式會社　文學社

關西一手販賣所
大阪市西區靱北通り二丁目
電話土佐堀一五二三番
振替口座大阪七四三番
株式會社　盛文館